

6. 勉強への構え



(Photo: 藤原 正)

👤👤👤 学校へ行きたくない 🧑🧑🧑

子どもたちの生活の中で、もっとも大きな比重を占めているのは学校生活であろう。もっとも、現在でもアジアやアフリカなどの地域では、学校へ通えない子どもも少なくないが、少なくとも今回の分析対象地域では学校が社会の中に機能しており、子どもたちはごくあたり前のように登校している。

そこで、まず「朝、学校へ行きたくない」と思っているかどうかをたずねてみた。表21(図3)に示したように、第1回の国際比較調査のデータを含めて、7都市に比較デー

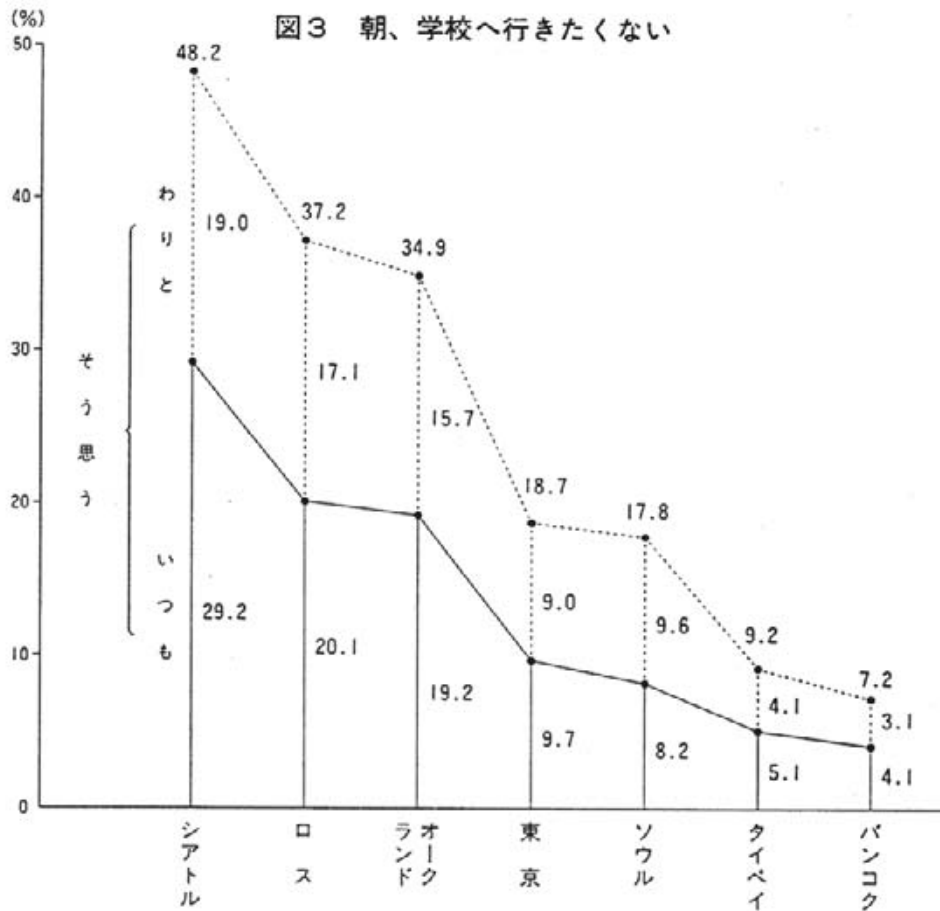
タを広げた場合、ロスやオークランドでは3分の1以上の子が、学校へ行きたくないと答えている。それに対し、アジア圏の子どもたちが学校へ行きたくないという割合は2割を下回り、とくにタイペイやバンコクでは、学校へ「行きたくない」と思っている子は1割を下回っている。

アメリカの学校は楽しい。それに対し、アジアの学校は楽しさに欠ける。そう感じているのに、図3の結果は印象に反しているように見える。

表21 朝、学校へ行きたくない

(%)

	そう思う			そう思わない			
	いつも	わりと	小計	たまに	あまり	まったく	小計
シアトル	29.2	19.0	48.2	24.8	13.3	13.7	27.0
ロス	20.1	17.1	37.2	29.2	15.7	17.9	33.6
オークランド	19.2	15.7	34.9	28.7	16.7	19.7	36.4
東京	9.7	9.0	18.7	35.4	20.3	25.6	45.9
バンコク	4.1	3.1	7.2	35.0	22.8	35.0	57.8
ソウル	8.2	9.6	17.8	24.9	26.9	30.4	57.3
タイペイ	5.1	4.1	9.2	31.7	19.7	39.4	59.1



教科の勉強は好きか

地域によるこうした違いについてのコメントは後にゆずるとして、学校の勉強が好きか

どうかを教科別にたずねると表22（図4）の通りとなる。

表22 勉強は好きか
—東京の子は好きではない—

(%)

		東京	ロス	オークランド	バンコク	シアトル	タイペイ	ソウル
国語	とても好き	18.5	42.8	51.6	32.4	20.4	37.9	31.2
	わりと好き	43.6	41.0	34.2	53.8	36.5	40.8	54.8
	あまり好きではない	27.7	8.9	9.0	12.8	21.9	17.3	11.9
	とても嫌い	10.2	7.3	5.2	1.0	21.2	4.0	2.1
算数	とても好き	25.1	48.0	44.5	49.0	43.6	21.5	33.6
	わりと好き	34.3	26.3	28.1	40.8	26.0	30.1	34.2
	あまり好きではない	26.8	15.4	13.9	8.5	12.6	35.2	19.9
	とても嫌い	13.8	10.3	13.5	1.7	17.8	13.2	12.3
理科	とても好き	34.2	49.5	43.6	47.0	36.3	17.4	41.8
	わりと好き	42.5	30.9	32.0	34.4	28.3	37.8	39.7
	あまり好きではない	18.1	15.2	15.4	14.7	14.2	36.5	15.5
	とても嫌い	5.2	4.4	9.0	3.9	21.2	8.3	3.0
社会	とても好き	22.0	23.9	36.9	50.0	21.6	19.1	21.2
	わりと好き	36.9	36.6	37.8	36.4	27.9	35.8	36.7
	あまり好きではない	28.8	23.1	16.9	11.4	21.0	34.2	27.9
	とても嫌い	12.3	16.4	8.4	2.2	29.5	10.9	14.2
4教科平均 —(とても好き)—		25.0	41.1	44.2	44.6	30.5	24.0	32.0

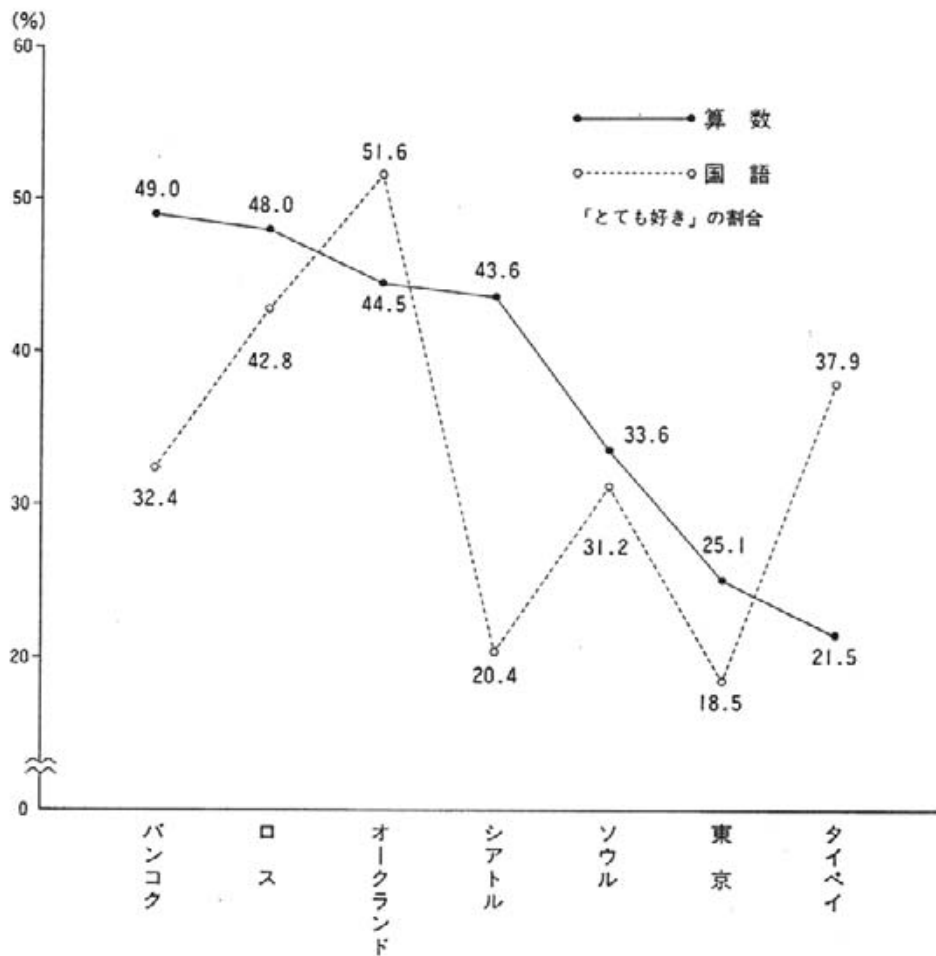
○ = それぞれの都市の中での最大値

4教科の平均を例にすると、教科の好きな割合がもっとも高いのがバンコク、オークランド、そしてロスで、東京の子の好きな子の割合は、タイペイの24%と同じように25%にとどまっている。

したがって、学校へ行きたくない割合と勉

強が好きな割合とは関係がなく、というよりむしろ、逆相関の関係が認められる。ロスの子どもたちは勉強は楽しいけれど、学校へ行くのはあまり好きでない。それに対し、東京の子は学校が嫌いとは思っていないが、勉強はそれほど楽しくないという感じである。

図4 算数と国語が好きか



家庭学習の長さ

それでは、子どもたちはどれくらいの長さ、家庭で勉強に時間を費やしているのでしょうか。帰宅後の勉強時間を表23に示したが、これでは数値がちらばっているので、勉強時間の平均値をとり、これと3時間以上勉強している子の割合とをひとつの表にまとめると、表24のような結果となる。

この結果によると、いちばん勉強時間の長いのがソウル、次がロス、続いてタイペイの順序で、東京の子どもは7都市中の5位、1時間17分で、むしろあまり勉強していないような感じである。

もちろん、こうした数値を解釈するには、それぞれの数値の背景にある地域の事情を視野に入れることが必要であろう。具体例として、ソウルの場合を考えるなら、ソウルでは

1980年に学習塾や家庭教師を禁止する大統領令が発せられ、現在でも、その原則が守られている。たしかにそれ以前、ソウルでは夜遅くまで塾通いする子の姿が認められ、それが子どもの健全な成長をそこなうという指摘が多くなされていた。それだけに、ソウルで学習塾を禁止した事情は理解できるのだが、そうはいつても、高学歴を求める社会の構造をそのままにして、塾通いを禁止したので、教育過熱状況はそのまま残存した。その結果、塾へ通う子どもの姿は消えたものの、子どもの家庭学習の長さはむしろ長びいたといわれる。

それに対し、表24に注記したように東京の子の通塾率は33%と3分の1に達するので、学習塾で勉強している時間を含めると、東京

表23 帰宅後の勉強時間

	東京	ロス	オークランド	バンコク
0分	6.9	3.7	6.5	2.3
1分～30分	26.6	5.3	29.8	9.3
31分～1時間	30.4	10.1	22.4	23.7
1時間1分～1時間30分	9.1	18.6	19.4	25.5
1時間31分～2時間	4.7	11.7	7.0	13.5
2時間1分～3時間	6.9	22.3	9.3	15.4
3時間以上	15.4	28.3	5.6	10.3

の子の学習時間はソウルの子にかなり近づいてこよう。

また、ロスの子どもの勉強時間が2時間25分なのも、アメリカの子どもにしては長いように思われる。しかしすでにふれた通り、今回の調査対象はロス郊外のトーランスで、この地域は、いわゆるWASPとよばれる人たちが多く住んでいるといわれる。実際にもロスのダウンタウンからトーランスへ車を乗っていくと、ホームレスの多い町からメキシコ系、あるいは黒人の多い町を経て、アジア系の住む町に入り、トーランスへ着く。

ヒバリーヒルズとまでいかないが、サンタモニカという感じの町で、さすがにそうした地域らしく、親たちは子どもをきちんとしつけ、そして勉強させるといわれる。

ロスの子どもの勉強時間の長いのは、そうした地域的な特性のもたらしたものであろうが、この表の中でも、シアトルの子どもの勉強時間はロスよりも1時間10分も短く、1時

間15分にとどまっている。

こうした書き方をすると、シアトルの子が勉強しないように思われるが、実をいうとシアトルは、アメリカ西海岸ワシントン州の経済の中心で、アメリカの中では教育熱心な人びとが多いといわれる。したがって、同じワシントン州でもシアトル以外の町へ行けば、家庭学習の時間はもっと短くなるだろう。

こうしたところにもアメリカの地域格差が、地域格差の少ない日本で考えるより、はるかに上回っている状況が感じられる。

表24中のバンコクは経済的な発展がめざましく、ソウルやタイペイ、香港、そしてシンガポールのNIESのエリアに続き、第5の都市として、NIESの仲間入りを果たそうとする都市である。そうしたバンコクも含めて、ソウル、タイペイと、NIESのエリアの子どもたちが教育過熱状況にまきこまれて、毎日、長い時間、勉強をしているのがわかる。

表24 帰宅後の平均勉強時間

	平均勉強時間	3時間以上勉強する子
ソウル	2時間54分	34.9%
ロス	2時間25分	28.3%
タイペイ	1時間51分	15.9%
バンコク	1時間44分	10.3%
東京	1時間17分	15.4%
シアトル	1時間15分	8.3%
オークランド	1時間13分	5.6%

東京=通塾率 32.9%

習いごと

すでにふれた通り、今回の調査地では、東京を除くと、学習塾は存在していなかった。バンコクの場合、富裕層の間に家庭教師についている子どもはいると思われるが、一般的には学習塾が普及するほど、経済力が高まっているような印象を受ける。

そして、ロスやオークランドではさまざまな背景からであろうが、少なくとも学習塾は認められない。しかしオークランドでは、町はずれにラグビーのクラブチームのハウスがあり、子どもたちがクラブに出入りしている。また、ロスでも、地域の中にさまざまなスポーツクラブがある。

そこで、習いごとの有無を調べると表25の通りとなる。バンコクでは外国語をマスターすると高収入が保証されるというので、子どもたちが外国語、とくに英語、最近では日本語を学んでいる。それに対し、ロスやオークランドでは、東京以上にスポーツや音楽のクラブや個人教授につく子どもの姿が認められる。

したがって、塾という形はとらなくとも、放課後に学校とは異質のスポーツや音楽のクラブへ通うのは、生活の安定した地域に共通した傾向なのかもしれない。

表25 習いごと

(%)

	東京	ロス	オークランド	バンコク
スポーツ	39.9	44.1	47.0	7.5
音楽	24.7	30.3	25.0	7.9
外国語	18.8	16.0	9.1	23.6
算数	32.9	17.9	16.5	30.8

勉強機の有無

表26(図5)に勉強機の有無を示した。東京の子どもたちが自分専用の机を持っている割合は94%に達する。第1回の国際調査でも、日本の子どもが机を持つ割合は93%に達する。

したがって、日本だと自分の勉強機を持っているのがあたり前のように思われがちだが、他の社会では、現在でも机を持っているのは常識でないように見える。

バンコクは、NIESより経済的な繁栄がいま一步なのを反映して、専用の机を持っている子が41%で、兄弟共有の机でがまんしている子が38%に達する。

そしてオークランドやロスでも、自分専用の勉強機の所持率は7割を下回っている。いうまでもなく、オークランドやロスは経済的に豊かな上に、家のスペースも広く、子どもに勉強機を与えようとすれば与えるのは可能

であろう。それにもかかわらず、専用の勉強機の所持率が7割以下なことは、その地域では子ども時代に勉強機を与える必要がない。つまり、ロスやオークランドでは、子ども時代の勉強にそれほど重きを置かない親たちの姿勢が感じられる。

オークランドはイギリス文化の影響を残しており、ロスとオークランドとをひとつにまとめるのはむずかしいが、欧米というにしてはアメリカの色彩が強いため、両市を仮にアメリカ文化圏のエリアと名づけてみたい。

そうすると、こうした勉強機の有無にも、ソウルやバンコクなどのNIESのエリアと、ロスやオークランドのアメリカ文化圏との間に経済的な、あるいは文化的な違いが感じられる。そうした中で、東京の子どもの勉強機の所持率は他の社会を圧倒しているのは表中

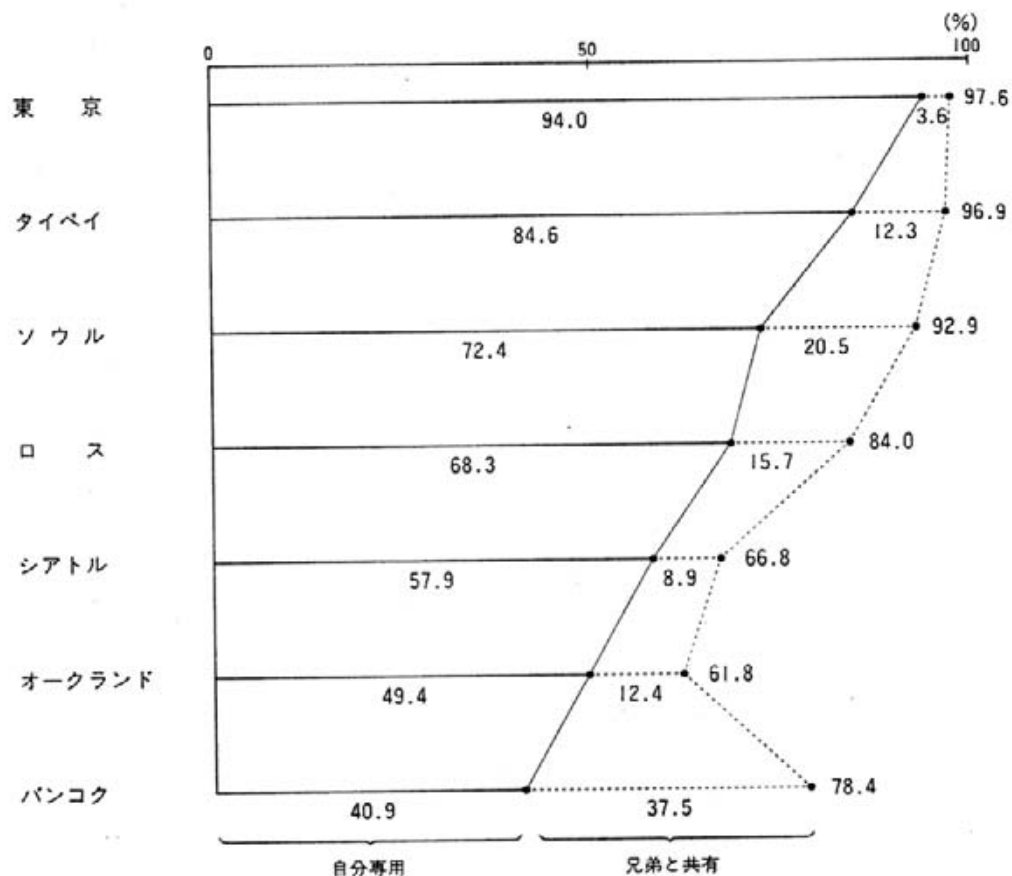
表26 勉強機の所持率

(%)

	自分専用	兄弟と共有	小計	机はない
東京	94.0	3.6	97.6	2.4
タイセイ	84.6	12.3	96.9	3.1
ソウル	72.4	20.5	92.9	7.1
ロス	68.3	15.7	84.0	16.0
シアトル	57.9	8.9	66.8	33.2
オークランド	49.4	12.4	61.8	38.2
バンコク	40.9	37.5	78.4	21.6

の数値の示す通りである。ここらにも、東京 エスカレートしていることが感じられる。
 の教育過熱状況が、他の社会と比べ、かなり

図5 勉強机を持っているか



7. 進学志望



(Photo: 和田光弘、世界文化フォト)

成績の自己評価

表27に学業成績についての自己評価を示した。「とても・かなり」成績が「よい」と思っている者の小計に着目すると、シアトルの子の75%、つまり、4人に3人の子が自分は成績がよいと思っているのに比べ、東京の子が「よい」と思う割合は2割を下回り、18%にとどまっている。

成績の自己評価の地域による開きは図6にも認められるが、いずれにせよ、成績の自己評価のもっともよいのがシアトルやロス、そして、オークランドのようなアメリカ文化圏、その上にバンコク、ソウル、タイペイなどのNIESのエリアが位置し、成績についての自信をもっとも持てない社会として東京が位置している。

そして今回の調査実施のため、各エリアを訪ねた個人的な印象からすると、表27の上から順に、東京、タイペイ、そしてソウルにバンコクというオーダーは、それぞれの社会の教育過熱状況の程度を反映しているように思われる。つまり、もっとも教育熱心なのが東京、そしてタイペイ、ソウルという感じで、そういう教育熱心なエリアほど、子どもたちが成績に対する自信を失いがちというのは興味深い傾向のように思われる。

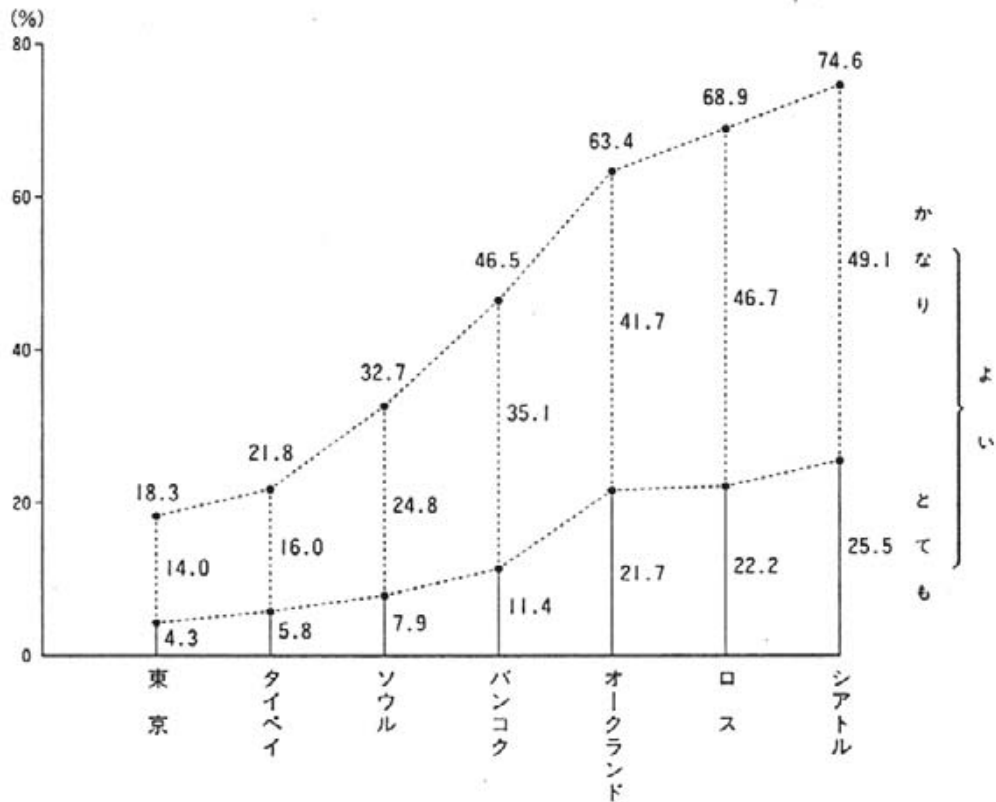
つまり、教育過熱状況が進むと、どの子どももよい成績をとりたいと思うようになり、それだけに成績の良し悪しに神経質となり、その結果、成績のよくない自分にこだわり、自信を失いがちになるのであろうか。

表27 成績の自己評価

(%)

	とても	かなり	平均	やや	さほど	少し	全然
東京	4.3	14.0	18.3	55.4	18.4	7.9	26.3
タイペイ	5.8	16.0	21.8	62.5	11.4	4.3	15.7
ソウル	7.9	24.8	32.7	45.3	17.1	4.9	22.0
バンコク	11.4	35.1	46.5	45.4	7.2	0.9	8.1
オークランド	21.7	41.7	63.4	26.1	9.4	1.1	10.5
ロス	22.2	46.7	68.9	26.1	4.2	0.8	5.0
シアトル	25.5	49.1	74.6	23.7	1.0	0.7	1.7

図6 成績のよい子の割合



大学進学志望率

学業成績が重みを持つのは、学業成績が将来に関係してくるからであろう。そこで、子どもたちに将来の学歴についてたずねると、表28のような結果が得られる。

ロスやソウル、そしてタイベイ、さらにバンコクの子どもの9割が大学進学を望んでいるのに対し、東京とオークランドの子どもの進学志望率は共に67%台と、3分の2程度にとどまっている。

なお、日本でも近年、海外の大学へ進む若者が増加しているが、地域によってはそうした傾向がより強く認められるので、外国の大学へ進みたい割合を含めて、大学進学志望率をまとめると表29となる。

この表から、2つの傾向を指摘することができよう。つまり、ソウルやバンコクなどのNIESのエリアでは大学進学志望率が高い

だけでなく、外国の大学へ進みたいと思っている者が4割を超える。

それに対し、ロスやオークランドなどのアメリカ文化圏のエリアでは進学率が高いといっても、大半は自分の国の大学へ進学する態度が認められる。

そうした中で、オークランドと東京の子どもの大学進学志望者が共に67%台にとどまっているのが注目をひく。

すでにふれたように、オークランドは広大で豊かな自然環境の中に羊より数の少ない人間が住む人間味あふれる社会で、こうした地域で成長していれば、大学へ進む気持ちが薄れるのが当然なのかもしれない。しかし、東京の子どもの大学進学志望率67%の背景は、オークランドとかなり異なるように考えられる。

表28 希望する最終学歴

—ロスの子は大学志望—

(%)

希望する最終学歴	東京 ソウル	ロス ソウル	オーク ランド	バンコク ソウル	ソウル ソウル	タイベイ ソウル	シアトル ソウル
小学校	1.4	1.4	6.0	2.3	2.1	1.3	4.7
中学校	31.4	7.8	26.2	4.6	4.6	7.3	10.5
高等学校	67.2	90.8	67.8	93.1	93.3	91.4	84.8

表29 外国の大学へ進みたい割合

(%)

	大学進学 志望率(A)	進学者中の 外国志望(B)	外国の大学へ 進みたい(AxB)
ソウル	93.3	46.0	42.9
バンコク	93.1	59.1	55.0
タイペイ	91.4	61.8	56.5
ロス	90.8	13.4	12.2
シアトル	84.8	6.6	5.6
オークランド	67.8	18.8	12.7
東京	67.2	10.9	7.3

進学率と成績

そうした問題を考えてみたいと、表30(図7)を作成してみた。これは大学進学志望率が学業成績の良し悪しによってどう変化するかを示したもので、ここでは、(A)つまり、「成績のとてもよい子」の大学進学志望率、バンコクの95%と、「成績のよくない子」の大学進学志望率(B)71%との割合、B/Aに着目したい。

バンコクの75%という数値は、勉強の苦手な子の大学進学志望率が、「成績のとてもよい子」の進学率を100としたとき、75.3%であることを意味している。

そして、ロスの92%、オークランドの79%など、他の地域では成績が不振さみだからといって、大学進学志望率はそれほど低下していない。

しかし東京の場合、成績が不振さみの子どもの大学進学志望率は、成績のよい子の62%にとどまっている。それだけ他の社会と比べ、東京の子どもにとって、成績の良し悪しが気になるのであろう。

いずれにせよ、表29、表30を重ね合わせていくと、大学進学にこだわらないアメリカ文化圏、そして外国の大学への進学を含めて意欲的なNIEESの子どもたち、さらに成績がふるわないと大学の進学を断念する東京の子どもというような構図がうかんでくる。

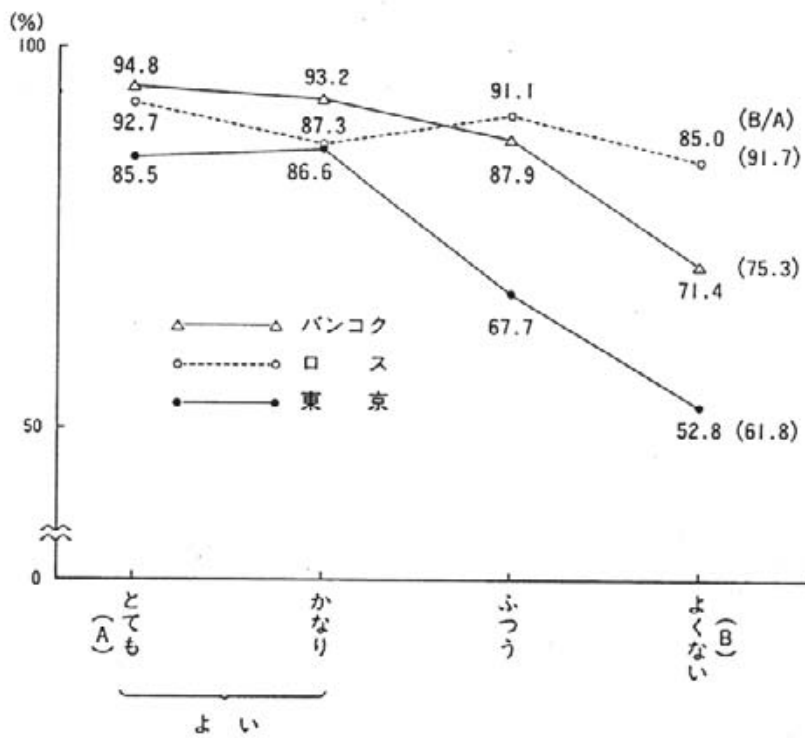
大づかみにすると、アメリカ文化圏の子どもに明るさを、そしてNIEESの子どもに意欲を、さらに東京の子どもたちに挫折の影を感じる。

表30 大学進学志望×成績

(%)

	よ い		ふ つ う	よ く な い (B)	B/A
	と て も (A)	か な り			
バンコク	94.8	93.2	87.9	71.4	75.3
ロ ス	92.7	87.3	91.1	85.0	91.7
オークランド	78.3	69.2	60.0	61.7	78.8
東 京	85.5	86.6	67.7	52.8	61.8

図7 大学進学志望×成績



8. 将来の生き方



(Photo: 佐藤元信、世界文化フォト)

👤👤👤 つきたい仕事 🧑🏫

そうした傾向はつきたい仕事についてたずねた表31(図8)にも認められる。この表は仕事につきたい割合を示しているが、ほとんどすべての項目で、つきたい割合がもっとも高いのがロス、次いでオークランド、3位にバンコク、もっとも数値の低いのが東京となる。

そして東京の子のなりたさが、他の都市なみなのは、下位の2項目、つまり、マンガ家と小学校教師くらいにとどまっている。

この「どんな仕事につきたいか」については、調査にあたって、いろいろな思い出がある。オークランドで調査をしているとき、vetという言葉に出会った。正直にいうと、vet(veterinary 獣医)という単語を知らなかった。「大きくなったら、どんな仕事につきたい

か」の欄に、この単語を書いている子が多い。同じ教室でプリテストを見てくれていた教師に聞いてみると、獣医(animal doctor)だという。

ニュージーランドは人口よりも羊が多いといわれる通りに、たしかにオークランド空港へ着く前に地上を見ていると、羊の群れがあちこちに点在している感じだった。いわば羊と人間とが同居している雰囲気、こうした環境では獣医になりたい子が多いのも当然だと思った。

その他に森林保安官や生物学者、あるいはチーズ屋、花屋など、自然と関連した仕事につきたいという子が多い。

これまでの国際調査でも、それぞれの社会らしさを反映した子どもの未来像を耳にして

きた。

アメリカでは大統領や市長になりたいという子が多い。聞いてみると「しあわせなアメリカを作りたい」「この町をもっと住みやすくしたい」など、子どもなりに考えた答えが戻ってくる。

そしてタイペイでは、海外の大学へ進み、アメリカで暮らしたいという声が多い。たしかに、政治的な状況を考えると、子どもたちがそう願うのも当然のように思う。またソウルではエンジニアやコンピュータの技師関係の仕事にあこがれる子が多い。NIESの言葉の通り、急速な形で工業化が進んでいる。そうした社会らしい子どもたちの反応である。

そしてニュージーランドの例に戻ると、この社会は自然を大事にするをモットーにしており、原子力の利用に慎重なだけでなく、工業化にも歯止めをかけている。経済的に少くらしい豊かななるよりも、自然の中で人間らしい暮らしを大事にしたいという社会だ。

バンコクでも、もうひとつの調査地点ロブ

リーで、子どもたちに「大きくなったら何になりたいのか」とたずねてみた。ひとりの男子が元気に手をあげた。「兵隊さんになりたい」という。そして、続いて手をあげた子どもも異口同音に「兵隊さん」という。そして、女子たちは「お母さん」や「先生」、「看護婦さん」が多かった。

別の学校でも同じような質問をしてみた。男子たちの反応はここでも同じで、「兵隊さんになりたい」が全員を占めた。

もっとも、あれだけ他の子が「兵隊さん」というのを聞くと、他の男子はそれ以外の職業を口にしにくいのかもしれない。

それにしても、兵隊になり、王様を守って国のために尽くしたいと子どもたちがいう。日本でも、明治や大正の調査をみると、大半の子どもたちが「兵隊になりたい」と答えている。現在の感覚ではわかりにくいのが、ロブリーの子どもたちは明るく「兵隊」を口にしていた。

つきたい職業がはっきりしていて、どの子

表31 つきたい仕事

(%)

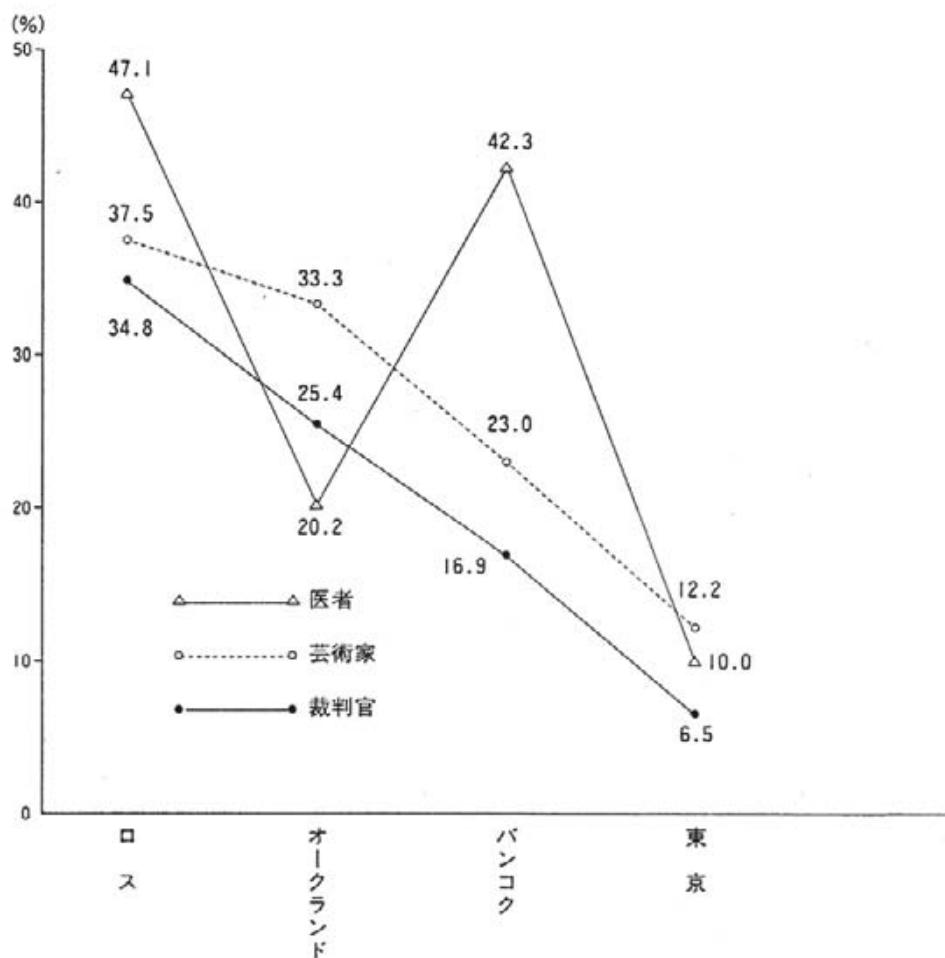
	東京	ロブリー	オークランド	バンコク
裁判官	6.5	34.8	25.4	16.9
大学教授	7.5	11.2	9.6	21.4
医者	10.0	47.1	20.2	42.3
芸術家	12.2	37.5	33.3	23.0
デザイナー	17.3	27.9	26.3	20.7
マンガ家	19.4	14.1	15.7	14.2
小学校教師	28.1	27.9	23.7	27.9

「つきたい」割合

もそれを目指す。シンプルで夢を抱ける社会という気がする。ロブリーから戻って、バンコクで同じ質問を行ってみた。さすがにバンコクでは「兵隊さん」に混じって、「コンピュータの技師」や「医者」、「会社の社長」などを

口にする子がいた。バンコクはロブリーよりも、それだけ都市化しているのであろうか。ということは、いずれロブリーの子もバンコクの子と同じように多様な生き方をするようになる日も近い気がする。

図8 つきたい仕事



👤 つきたい仕事と成績 📊

表32は仕事のつきたさと学業成績との関係を調べたもので、ここでもB/Aの欄に注目してほしい。

いちばん上の欄、裁判官のオークランドを例にとると、オークランドの子どものうち、「成績のとてもよい子」(A)が裁判官になり

たい割合が33%、それに対し、「成績のよくない子」が裁判官になりたい(B)のが25%で、B/Aは76.9%となる。つまり、成績のふるわない子が裁判官を目指す割合が、「成績のとてもよい子」を100としたときの77%にとどまることを、この数値は意味している。

そこで、この表32の中から、B/Aの数値の低い項目を拾い出してみると、裁判官については、ロスの子が成績がふるわないと裁判官につきたくない。というより、裁判官になれないと思っている。そして、大学教授については、オークランドとバンコクの子が成績が悪いとつけなないと感じているなど、地域によって、つきたさと成績との関係に独自のカラーが見いだされる。

しかしそれ以上に気になるのは、東京の子の数値の低さで、裁判官23%、大学教授30%、医者25%と、成績が不振な子がビッグなゴールを目指す場合は、成績のよい子の4分の1程度にとどまっている。つまり、それだけ東京の子どもたちは、学業成績が将来に影響を及ぼすと考え、そして、成績の良し悪しを常に意識して生活しているのであろう。

表32 つきたい仕事×成績

(%)

		全 体	よ い		ふ づ う	よ く な い (B)	B/A
			と ても (A)	か な り			
裁 判 官	オークランド	25.4	32.9	24.2	20.1	25.3	76.9
	ロ ス	34.8	47.5	33.9	31.9	20.0	42.1
	東 京	6.5	16.4	10.6	5.2	3.8	23.2
	バンコク	16.9	18.8	20.5	20.5	15.4	81.9
大 学 教 授	オークランド	9.6	16.4	9.2	4.9	7.4	45.1
	ロ ス	11.2	8.9	12.5	14.9	7.5	84.3
	東 京	7.5	16.9	15.6	5.7	5.1	30.2
	バンコク	21.4	17.7	29.0	18.0	8.2	46.3
医 者	オークランド	20.2	22.4	21.1	17.0	20.0	89.3
	ロ ス	47.1	51.3	48.8	44.7	36.7	71.5
	東 京	10.0	29.1	17.9	7.9	7.3	25.1
	バンコク	42.3	55.2	50.8	36.6	23.0	41.7

「つきたい」割合

将来の生活

次の表33 (図9) は、子どもたちに、将来どういう生活を送れそうなのかをたずねた結果を示している。

ロスやオークランドの子どもたちは、「有名になる」はむずかしいかもしれないが、6割くらいはなんとかなりそうだし、仕事面で成功する可能性は9割を超えるし、しあわせな家庭はほぼ間違いなく作れると思っている。そしてバンコクの子も、有名になるのはむずかしいとしても、その他の面では未来に明るい見通しを抱いている。

そうした中で、東京の子どもは仕事の面での成功についても、「なんとかなりそう」を含めて6割にとどまり、全体として未来に閉ざされた感じを抱いている。

どうして東京の子どもは成績が下位になるにつれて、将来が暗く閉ざされていると思うのか。表34は、そうした背景を考えようとして作成したもので、B/Aに着目すると、ロスやオークランドの子は4分の3以上の数値を示している。

つまり、アメリカ文化圏では成績が悪くとも、将来については成績のよい子と同じような明るい見通しを持っているのに対し、日本の子の場合、成績が不振な子が望みを抱く割

合は、成績のよい子の3～4割にとどまっている。

このように、アメリカ文化圏の子どもは学業成績の良し悪しは将来に影響を及ぼさないと考えている。しかし、東京の子どもたちは学業成績は決定的な影響を及ぼすと感じているのはすでにふれた通りである。

なお、「勉強が得意な子はなぜ得意なのか」をたずねた結果を表35に示したが、どの地域の子も、「先生の話聞くから」と答えている。それと同時に、アメリカ文化圏の子どもたちが、「頭がいいから」と、いわば才能の差を認めているのが注目をひく。

それに対し、東京やソウルの子は才能の差を低く評価し、学習努力がよい成績をもたらすと、努力する態度を大事にしている。才能の開きなどは少ない、どの子どもでもがんばればなんとかなるという努力至上主義的な考え方である。

こうした場合、成績がよければ努力が報われたと思える。しかし成績が不振ぎみになると、努力不足を感じて、自己像が縮小していく。東京の子どもたちが未来に夢を抱かないのも、そうした学業成績の意味が重すぎることから生ずるものなのかもしれない。

表33 将来の見通し

(%)

		東 京	ロ ス	オークランド	バンコク
有名人になる	きっと	10.4	30.2	35.4	9.7
	たぶん	12.5	32.6	18.6	52.1
	小 計	22.9	62.8	54.0	61.8
皆から好かれる人になる	きっと	12.2	47.6	34.8	24.3
	たぶん	45.6	41.8	33.0	67.4
	小 計	57.8	89.4	67.8	91.7
お金持ちになる	きっと	14.2	46.7	46.8	9.9
	たぶん	19.0	34.2	18.7	52.5
	小 計	33.2	80.9	65.5	62.4
仕事で成功する	きっと	21.7	71.4	63.8	29.3
	たぶん	38.1	26.4	25.9	61.2
	小 計	59.8	97.8	89.7	90.5
よい父(母)親になる	きっと	25.8	85.2	72.3	55.8
	たぶん	44.6	12.7	17.7	41.3
	小 計	70.4	97.9	90.0	97.1
しあわせな家庭を作る	きっと	39.0	88.7	78.4	57.4
	たぶん	36.0	9.7	13.7	39.7
	小 計	75.0	98.4	92.1	97.1

○ = 最大値 — = 最小値

図9 将来の見通し

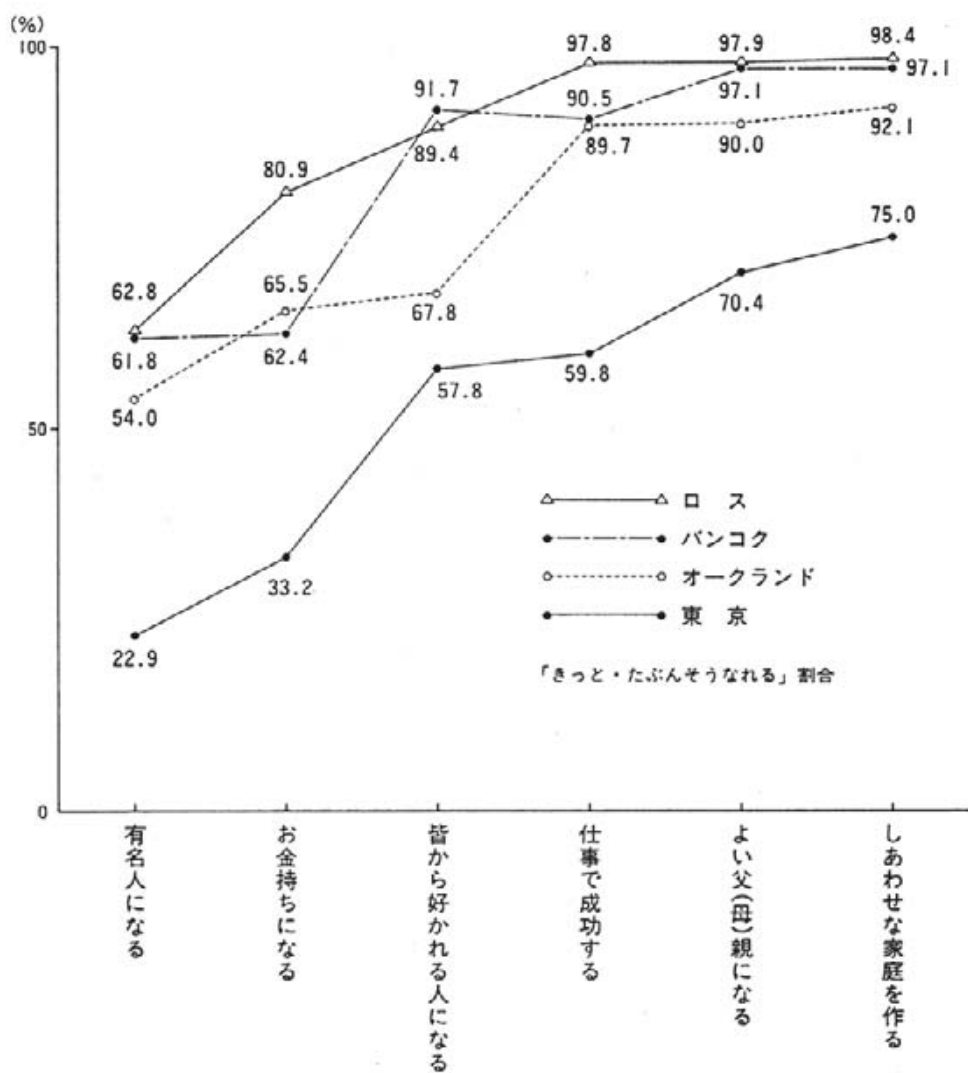


表34 将来の見通し×成績

(%)

		よ		ふつ	よくないB	B/A
		とても(A)	かなり			
仕事で成功する人	東京	55.6	33.7	18.2	17.3	31.1
	バンコク	40.0	34.6	26.8	18.2	45.5
	ロス	80.0	70.1	64.8	61.5	76.9
	オークランド	76.6	63.2	50.0	67.6	88.3
しあわせな家庭	東京	67.3	55.4	37.4	28.7	42.6
	バンコク	60.0	60.8	55.5	50.0	83.3
	ロス	91.3	87.4	84.8	83.1	91.0
	オークランド	84.5	77.1	75.6	78.8	93.3

「きっとそうなる」割合

表35 勉強が得意な理由

(%)

	ソウル	バンコク	タイペイ	東京	ロス
先生の話を聞くから	74.9	74.4	70.0	66.8	57.0
家で勉強するから	42.6	71.0	44.1	37.4	48.7
頭がいいから	25.6	61.2	22.1	33.9	52.0

「とてもそう思う」割合

9. 性差をめぐって



(Photo: 坂本鉄平)

女子の生き方

そうした中で、東京の子どもたちは社会的な達成は無理としても、それだけにしあわせな家庭を作ろうとしている。そこで、子どもたちがどういう家庭を作ろうとしているのかを、国際比較の形でとらえることにした。

表36 (図10) は、女子を対象に結婚しても仕事を続けるか、それとも仕事をやめるかをたずねたものだが、ロスの女子の71%、そしてオークランドの56%と、半数以上が、結婚後も仕事を続けると答えている。

しかし、東京の女子では仕事を続けるが36%、仕事をやめるが60%で、家庭志向の傾向が認められる。

そして、女子と同じような家庭志向の傾向が、男子を対象とした表37 (図11) にも認められる。つまり、ロスやオークランドなどのアメリカ文化圏では、「結婚しても子どもを持たずに働く人」とを含めると、半数以上——ロスでは55%、オークランドは60%——が、仕事を持つ人と結婚するつもりと、共働きの家庭を作ろうとしているのに対し、東京の子どもが共働きを望むのは41%で、59%とほぼ6割が専業主婦の妻を求めている。そして同じアジアでも、バンコクの男子の専業主婦を妻にしたい割合が39%にとどまっているのと、著しい対比を示している。

表36 女子の生き方（女子）

（%）

	結婚しても 仕事を続ける	結婚しても子どもを 持たずに働く	結婚したら 仕事をやめる
ロ ス	71.0	10.6	18.4
バンコク	59.1	11.1	29.8
オークランド	56.3	15.7	28.0
東 京	36.1	4.2	59.7

図10 女子の生き方（女子）

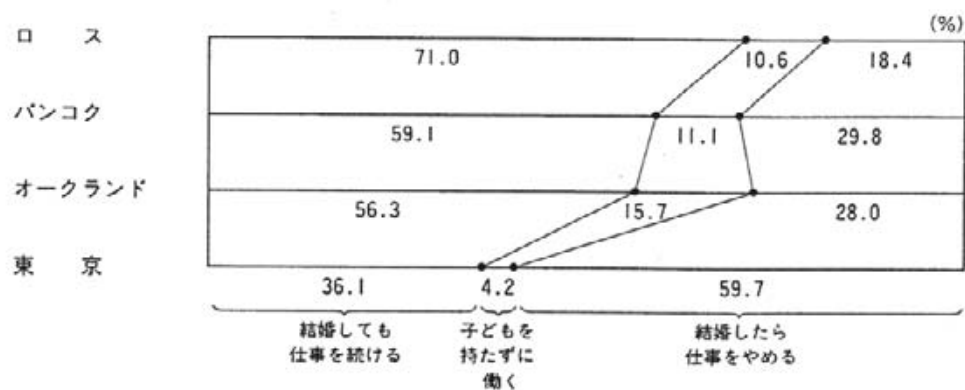
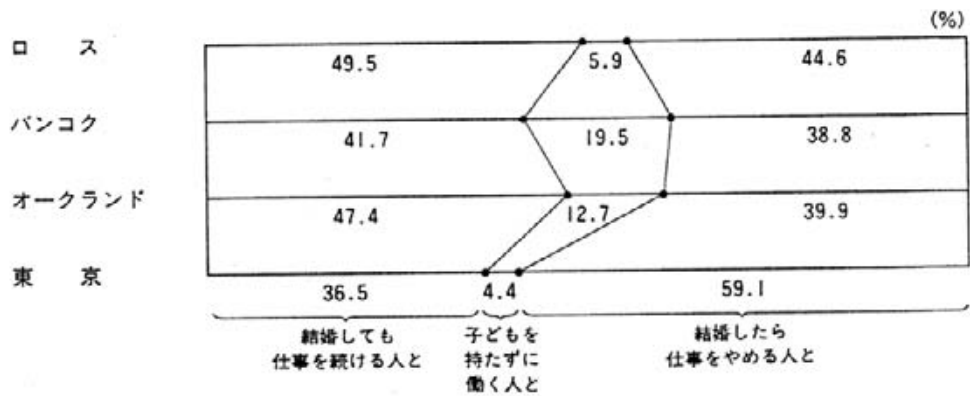


表37 男子の結婚観（男子）

(%)

	結婚しても 仕事を続ける人と	結婚しても子どもを 持たずに働く人と	結婚したら 仕事をやめる人と
ロ ス	49.5	5.9	44.6
バンコク	41.7	19.5	38.8
オークランド	47.4	12.7	39.9
東 京	36.5	4.4	59.1

図11 男子の結婚観（男子）



主婦志向と成績

念のために、女子の主婦志向と学業成績との関係を調べると、表38のような結果となる。

これまでと同じように、B/Aに着目してみたい。オークランドやバンコクでは成績のよい女子ほど、将来の生き方として、専業主婦の道を選んでいる。つまり、専業主婦が自己実現の道と考えているのに、東京やロスの子は成績が下位になるにつれて専業主婦志向が強まる。こうしたエリアでは社会的な達成を断念した結果、主婦への道を選ぶという感じになる。

そして、表39に、男子が主婦志向をする妻と結婚したい割合を学業成績別に示した。専業主婦を迎えるのが男子の生きがいの感覚を持っているのは、バンコク、そして東京で、ロスとオークランドでは成績のよい子ほど、専業主婦を敬遠し、働く女性と結婚しようとする傾向が認められる。

この表36～39は複雑にいくつにわたっているが、表36～37を生き方についての実際、そして表38～39が願望を表すものとみなしてみよう。つまり、表38～39を通して、本来ならどうし

たいかという子どもたちの願いがとらえられると思われるからである。そうすると、4つのエリアについて、以下のように図化することができる。

	女子		男子	
	実際	理念	実際	理念
ロス	仕事	仕事	仕事	仕事
オークランド	仕事	主婦	仕事	仕事
バンコク	仕事	主婦	仕事	主婦
東京	主婦	仕事	主婦	主婦

つまり、男女共に女子が仕事を持つのを肯定し支持しているのがロス。それに対し、主婦にあこがれを持ちながら、現実的に仕事を持たざるをえないのがバンコク。さらに、仕事を認めながらも、女子の間に主婦に対するあこがれのあるオークランドとなる。そして東京は、女子の反応はともかく、男子の間の主婦志向の強さが目につく。

表38 主婦志向×成績（女子）

(%)

	よ い		ふつう	よくない(B)	B/A
	とても(A)	かなり			
ロ ス	16.7	23.2	18.6	22.2	132.9
バンコク	31.4	28.0	32.9	19.0	60.5
オークランド	30.7	27.8	26.6	23.7	77.2
東 京	44.4	63.9	59.3	60.2	135.6

「結婚したら仕事をやめて主婦になる」割合

表39 主婦志向×成績（男子）

(%)

	よ い		ふつう	よくない(B)	B/A
	とても(A)	かなり			
ロンドン	42.9	37.8	52.5	50.0	116.6
バンコク	52.3	31.3	40.1	28.9	55.3
オークランド	30.2	43.2	38.8	43.9	145.4
東 京	69.4	64.9	58.5	55.9	80.5

「結婚したら仕事をやめて主婦になる人」との割合

手伝いと性差

そこで、性差と意識との関係を手伝いに例をとってまとめてみると、表40のB/Aの感じになる。

女子の手伝い率を分母、男子の手伝い率を分子にとり、性差によって手伝う割合がどう変わるのか調べると、表中の下欄から明らかのように、ロスやオークランドなどのアメリカ文化圏の男子たちは女子とほぼ同じように

手伝っている。とくに、オークランドでは性差のなさが目につく。

それに対し、東京の男子たちは女子の半分くらいしか手伝っていない。手伝い率そのものが低めなのに加え、とくに男子が手伝わないので、男子はほとんど何もしていない感じになる。

表40 手伝い×性差

(%)

	東京			ロス			オークランド			バンコク		
	男子(B)	女子(A)	B/A	男子(B)	女子(A)	B/A	男子(B)	女子(A)	B/A	男子(B)	女子(A)	B/A
洗濯	0.9	1.8	50.0	3.2	7.7	41.6	4.5	4.2	107.1	5.3	13.4	39.6
庭の掃除	1.8	3.9	46.2	3.2	2.2	145.5	5.5	1.2	458.3	12.2	10.6	115.1
夕食の買い物	2.4	3.5	68.6	6.9	8.2	84.1	7.0	7.3	95.9	7.3	9.4	77.7
血洗い	2.5	10.3	24.3	11.7	23.1	50.6	30.9	30.7	100.7	21.7	33.1	65.6
部屋の掃除	4.6	8.5	54.1	22.9	29.7	77.1	16.8	21.6	77.8	16.8	26.3	63.9
夕食の手伝い	4.8	12.4	38.7	13.4	26.8	50.0	12.8	14.2	90.1	5.3	9.5	55.8
兄弟の世話	10.9	14.5	75.2	19.0	24.6	77.2	13.2	16.4	80.5	25.5	35.0	72.9
部屋のかたづけ	13.3	24.0	55.4	17.9	6.0	298.3	11.4	3.8	300.0	18.6	20.2	92.1
平均			51.6			103.1			163.8			72.8

自己評価と性差

いずれにせよ、東京の子どもたち、なかでも女子の自己評価の低さが気になりとなる。そこで、女子たちの将来の見通しが、国際比較の中でどうなるのかをまとめると、表41の通りとなる。

不等号の向きが示すように、アメリカ文化圏でも、「有名人になる」などの社会的な達成については、男子のほうが女子よりそう思っている割合が高い。しかし「皆から好かれる」などの人間的な見通しについては、女子のほ

表41 将来の見通し×性差

(%)

	東京		ロス		オークランド		バンコク	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
有名人になる	14.8	5.4	35.5	24.4	41.9	29.2	9.7	9.7
皆から好かれる人になる	14.1	10.0	47.1	48.1	30.5	38.4	24.5	24.0
お金持ちになる	20.7	6.8	52.8	40.2	51.7	42.3	9.4	10.3
仕事で成功する	26.3	16.3	72.7	70.7	65.9	61.7	23.6	33.8
よい父(母)親になる	26.7	24.8	80.7	89.6	70.7	74.0	54.5	56.7
しあわせな家庭を作る	35.2	43.1	87.7	89.7	76.2	80.2	57.3	57.4

「きっとそうなる」割合

うが男子よりもそう思っている者が多い。しかし東京の場合、領域を越えて、女子の割合が低い。

そして、表42(図12)の示す通り、そうした女子の見通しの暗さは自己評価についてもあてはまる。つまり、図のプロフィールからも明らかなように、自己像が明るく、性差の少ないアメリカ文化圏と比べ、NIESのエリアでは自己評価も低下し、女子も自信を持

てない。そして、東京の子は全体として自信を欠きがちなのに加え、とくに女子の自信のなさが著しい。

なお、表43に表21から表42までの結果をひとつにまとめてみた。全体として、ロスやオークランドのアメリカ文化圏の子どもたちが明るい毎日を送っているのに比べ、東京の子どもたちの未来像が暗いのが目につく。

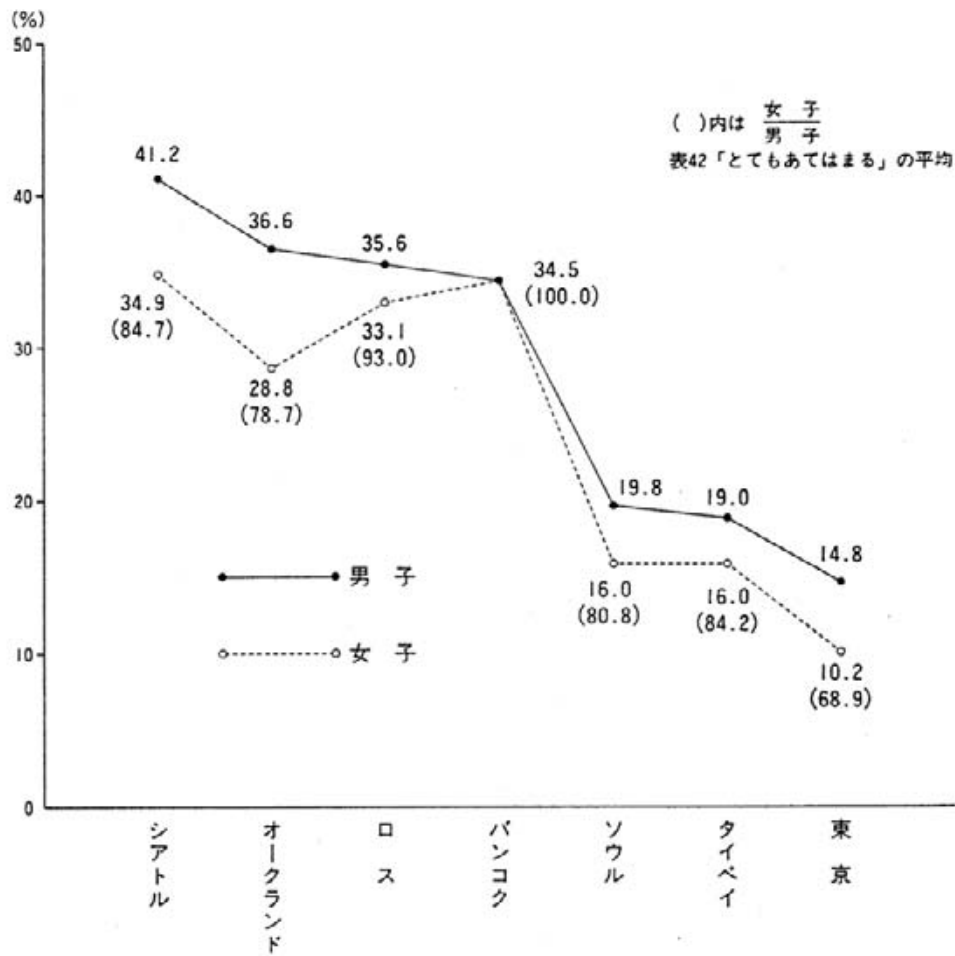
表42 自己評価×性差

(%)

	東京		ロス		オークランド		バンコク		ソウル		タイペイ		シアトル	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
スポーツのうまい子	23.1	12.5	52.1	27.1	53.3	21.6	32.5	20.1	31.5	17.0	31.8	9.7	50.7	23.6
友だちから人気のある子 (d.9d)	9.9	5.6	29.4	30.6	33.7	24.8	58.5	52.9	8.3	5.7	38.5	47.5	52.9	56.2
よく勉強ができる子	8.1	4.2	25.9	29.3	26.3	27.3	19.3	23.6	9.0	6.7	7.7	4.7	33.1	36.5
正直な子 (d.9d)	12.3	7.5	36.9	36.3	31.1	35.0	41.8	50.6	18.8	17.0	13.4	13.5	30.9	27.7
親切な子 (d.9d)	14.5	10.9	31.6	39.4	33.5	34.0	38.2	41.3	20.1	19.8	11.7	12.1	33.3	35.1
よく働く子	17.4	13.9	35.8	39.1	32.6	33.1	22.8	29.2	25.2	24.1	12.0	12.8	38.4	35.0
勇気のある子	18.5	16.6	37.6	30.2	45.7	25.6	28.6	23.9	25.7	21.6	18.1	11.5	48.9	30.1
平均	14.8	10.2	35.6	33.1	36.6	28.8	34.5	34.5	19.8	16.0	19.0	16.0	41.2	34.9

「とてもあてはまる」割合

図12 自己評価×性差



()内は 女子
男子
表42「とてもあてはまる」の平均

表43 将来の生き方についてのまとめ

	学校へ行きたくない(いつも)	勉強時間	専用の勉強机	成績の自己評価(とてもよい)	大学進学志望	裁判官になりたい	仕事で成功する(きっと)	結婚したら仕事をやめる(女子)	結婚したら仕事をやめる人(男子)
ロス	20.1	2時間25分	68.3	22.2	90.8	34.8	71.4	18.4	44.6
オークランド	19.2	1時間13分	49.4	21.7	67.8	25.4	63.8	28.0	39.9
バンコク	4.1	1時間44分	40.9	11.4	93.1	16.9	29.3	29.8	38.8
東京	9.7	1時間17分	94.0	4.3	67.2	6.5	21.7	59.7	59.1

10. フィールド・ノートから



(Photo: (株)写真工房、世界文化フォト)

今回の調査でも、それぞれの地域を訪ねてプリテストの打ち合わせをしたり、ヒヤリングを重ねてきた。そうした実地調査を通していろいろと感じたものが少なくない。以下、そうしたノートを参考までに記述しておく。

👤👤👤 [バンコク] 👤👤

ストリート・チルドレンの姿がない

1989年、バンコクへ飛んだ。はじめ、10月を予定したのだが、学期休みで、どの学校もクローズしているという。2学期制であり、ちょうど10月が休みにあたるということで、やむなく、12月末に出かけることになった。

いちばんの冬将軍が到来したという日の朝、成田を出発した。外の気温は3度、そして、6時間半のフライトの後、バンコクに着くと、外気は30度だった。

真冬から真夏へとびこんだようで、汗がふ

き出してくる。もっとも、ホテルまでクーラーのきいた車に乗ったから、あまりえらそうなことはいえない。

市内に近づくと、奇妙な車が目につく。昔なつかしいオート三輪が客を乗せて走っている。マニラでは、ジープをかざりたて、音楽をガンガン流しながら走るジブニーを見て驚いたが、バンコクの三輪車はサムローというらしい。

ガイドの話によると、メーターがついていないので、行き先をいって値段を交渉するとか。もちろん相乗りもあるが、交通渋滞をし

ていても、すき間を見つけてスイスイと通り抜ける。残念ながらオープンカーなので暑そうなのはたしかだが、ちょっと乗ってみたい気がする。しかし、ほとんど英語を話せないというので、試乗は断念した。もっとも、メーターがついていないのはタクシーも同じだというから、バンコクで行動するためにはタイ語を話すことが必要になる。

もっとも、タイ語は子音44、母音が32あるといわれ、母音の発音を習ってみたが、むずかしすぎて、すぐに断念した。というわけで、バンコクでは滞在中、通訳に行動をともしてもらった。

そうした印象はともかく、ホテルに着くまでの間、アジアの多くの町で見かけるような物売りをする子どもの姿がなかった。マニラなどでは、花やタバコ、新聞を売る子どもが多かったし、ホテルで車がとまると、ドアを開けてチップをかせごうとする子が集まってくる。

安定した家庭で保護を受けることができずに、町をさまよう子どもたち。つまり、ストリート・チルドレンの姿を見かけるのが、NIES以外のアジアの町であった。しかしバンコクでは、概観したところでは、ストリート・チルドレンの姿は少なかった。

もちろんバンコク滞在中に、水上生活者の集落を訪ねた。大きなスラム街で、学校に行けない子も多いと聞く。したがって、バンコク全体がストリート・チルドレンと無縁の町ということとはできないが、アジアの中では、子どもたちが安定した生活を送っている町という印象を受けた。

サムローから人力車へ

タイというとバンコクをイメージに抱く。東京やソウルと同じように、タイでも首都への人口集中に悩んでいると聞くが、それでも、バンコク以外の地域の教育を見たほうがよいというので、バンコクから150キロほど北のロブリーを訪ねることにした。

朝早くバンコクを離れ、ロブリーへ向かう。

経済発展の途上国らしく、ところどころで大がかりな道路工事をしているのが目につく。なにしろ、車を往来させながら、土を平らにし道を作る作業をしているので、土けむりの立ちこめる中をがたごと道を通り抜ける感じになる。

マニラやクアラルンプールなどでは、都市を少し離れると、すぐに貧しい農村風景が展開される。それだけに、バンコクでも農村部へ行くにつれて、人々の暮らしがどうなるかに関心を持った。

バンコクでは、タクシーと並んで、オート三輪のサムローが市民の足として活躍している。エンジンをふかしながら通り過ぎるのがカッコよく思われたので乗ってみることにした。といっても、メーターがついていないので値段を交渉しなければならない。同行していた通訳から、ホテルからダウンタウンにある日本のデパートまで30バーツ(150円)くらいとおおよその見当を聞いた。しかし、いざ乗ろうとすると100バーツだという。日本人と見て値段を高くしたのであろうが、交渉の結果60バーツ(300円)で客になることにした。

30度を超える暑さの中をバタバタと音をたてながら走っていくのが思ったよりも気持ちがいい。帰りもサムローに乗ったが、言葉がわからなくても、なんとなく気持ちが通じるようでサムローのファンになった。

しかし、郊外へ出るにつれてサムローの代わりに、小型のトラックに幌をかぶせた乗り合いバスや自転車での乗る台を引っぱる人力車が目にとまるようになる。乗り合いバスの後ろに車掌役の子どもがいて料金を徴収するシステムだが、こうしたところにも働く子どもの姿が見られる。

サムローから自転車の人力車へというのが都市と農村との落差なのであろうが、ロブリーへ行く途中に、由緒ある寺があるというので立ち寄ることにした。

バンコクにはさまざまな寺院がある。町を歩いているだけでも遠くにバゴダが見え、旅情をそそる。ワット・トライミント(黄金仏

寺院) や、ワット・アルン (暁の寺院) など、その中でもなじみ深いのが、日本の寺と比べると底抜けに明るい。金色をベースに、さまざまな色でかざられた派手な外観を見るだけで、わびやさびに慣れた我々は、圧倒される感じがする。それでも、郊外の寺院は自然に囲まれた中に塔が建てられているので、なんともおごそかで手を合わせたくなる。

しかし、寺院のまわりに物売りがたむろして、押し売りに近い形で集まってくる。お菓子や花、そして人形などだが、中には籠に鳥を入れて持ち歩いている人がいる。それを求め、鳥を放してやると功德になるとかで5パーツで籠をもらい出口を開けると、鳥は近くの森へと飛んでいった。功德をした気持ちになったのも確かだが、なんとなく、行商人の口車に乗った感じもした。そして、ここでも小さな子どもたちがいて、おとなに混じって行商をしていた。

社会福祉型の学校

ロブリーへの道中、いくつかの集落に立ち寄りもらった。生活が豊かとはいいいくいが、かといって、食うに困って離散という感じでもない。バンコクに近いせいか、貧しいながらも安定した農村の風景であった。

ロブリーは軍隊の本部があるところとかで、地方都市の中でも落ち着いた雰囲気を保っていた。さっそく、学校を見せてもらった。

40人前後の子どもたちが、静かに先生の話の聞いている。どの子どもも教科書やノートを持ち——あたり前のことのように、アジアでは決してふつうの光景ではない——、着ているものもこざっぱりとしていた。

校長の話では少なくともロブリーの近くに限定と、子どもの中には昼食を持ってこられない子がいるものの、どの子も学校に来ている。だから、就学率は100%だという。

小学校の中に食堂があったので見せてもらった。コンクリートの上にトタンの屋根がつき、木製のベンチが置かれているというシンプルなものだが、片隅に調理場がある。そし



て、ラーメンのようなものやパンの一種、さらにカレー風の料理を作っている。地元の人が働いているとかで、一品が2パーツ(10円)から、高くても5パーツ(25円)どまりである。2パーツだと安すぎるようだが、学校ならたくさんの子供が食べてくれるので商売になる。そして、学校も出入りの業者を指導できるので、安心して見ていられる。さらに、子どもたちも安くおいしい料理を温かいうちに食べられるというので三方一両得の制度になる。

もっとも、この地域の母親たちは近くの工場などへ働きにいられているので、子どもたちは朝早いうちから学校に来て遊び始める。そして、放課後も親が迎えに来てくれるまで校庭にいらるので、ときには6時近くまで子どもたちが在校している。

夕方は、2~3人の教師を残して子どもたちの安全を見守っているそうだが、それにしても、子どもたちの在校時間は7時頃から夕方5時頃まで、10時間に達する。日本式のいい方をするなら、学校と学童保育とが一緒になった社会福祉型の学校である。子どもによっては、教室の中で仮眠をとったり、先述の食堂でおやつを食べたり、ときには教室で宿題をしたりして、夕方までを過ごすらしい。

「子どもたちが学校に一日中いるのでは大変ですね」という感想に、「そうはいつでも、あの子たちは他に安心して暮らせる場所はないし、仕方がないと思います」との返事が戻ってきた。

日本の学校を見ていると、学校の機能について考えさせられることが多い。家庭と学校、あるいは、地域社会と学校との境界があいまいになり、学校が過大の機能を果たそうとしたり、逆に、学校としての一つの責務を果たさずに無責任に家庭に責任を押しついたりしている。それだけに地域と家庭、そして学校との線引きが大事になってくるが、ロブリーの場合はまだそれ以前で、学校が子どもたちにとって、行けばなんとかしてくれるという“かけこみ寺”のような機能を果たしているらしい。学校教育の形成期には、こうした問題は避けて通れないのであろう。

高学歴はエリートへの道

ホテルのまわりに屋台がでている。屋台が多いのはバンコクにかぎらず、タイペイやソウルなど、東南アジアに共通にみられるが、バンコクの中心街の場合、ライスに野菜をかけた、肉入りのヌードルなどが10バーツ(50円)、果物やまんじゅうが5バーツ(25円)で、大半の人は10~15バーツで昼食をすます



らしい。それでも、これはいわば都心部の物価で、都心から離れると、物価はほぼ半分になる。

日本労働協会編の『タイの労働事情』に収録されている資料によると、1985年、勤労者の平均所得は4,000バーツ(2万円)で、最低賃金は日給73バーツ(365円)だという。そして、大学卒の場合、初任給がほぼ4,000バーツで、役職者の場合、1万5,000バーツくらいのタイとしては高収入を得るが、勤労者の教育レベルについては、以下のような数値が示されている。

	全体	1991年 新規労働者(推定)
初等教育	90.2%	52.9%
中等教育	4.8	23.7
職業教育	1.9	15.6
大学	2.6(1.7)	7.7(1.3)
その他	0.4	0

()は教員養成

(日本労働協会『タイの労働事情』、昭和63年、P.58)

つまり、9割以上が初等教育という、いわば低学歴の労働力構成から、中等教育以上が半数に迫る高学歴の構成へ、労働力を大きく変えようとしているのが、現代のタイなのであろう。ちなみに、学歴別の職位構成については、以下のように初等教育=生産従業者、高等教育=管理職という、学歴に対応した就労形態がきっちりととられている。

	生産従業職	監督職	管理職
小学卒	93.8%	6.2%	0%
中学卒	89.5	10.3	0.2
高校卒	46.7	45.2	8.0
大学卒	0	17.5	82.5

(前掲書 P.196)

したがって管理職につき高収入を得るためには高学歴の取得が必要となるのであろうが、進学に経費がかかるから、現在のところ日本やNIESの社会のように進学の嵐が社会全体にふきあれているという感じになっていない。

ミリタントな風景

これまで、かなりの数の国の学校を訪ねてきた。そしてその社会により、その社会らしい学校があるのに気づいた。陽気で楽しそうなロサンゼルス、そして几帳面で整然としたハンブルグ、あるいは、なんとなくしゃれたバリ、活気にみちあふれたシンガポールなどがイメージに浮かんでくる。

そうした意味からすると、バンコクの学校のイメージは、「王様と私」のようなきちんとした秩序の保たれた王朝文化の中の学校という印象を受ける。

実際に教室に入っても、室内がしんとしている。そして、子どもたちが正面を向き、静かに話を聞いている。日本の場合、静かといってもなんとなくざわついているが、バンコクの教室は文字通りにしんとしている。

そして、教師から指名されたときもみんなが一斉にわいわい騒ぐのではなく、静かに手をあげる。それだけに、教室内に40人もの子どもたちがいないように思う。

実をいうと、そうした静かな雰囲気は教室内だけでなく、校庭での子どもの動きにもみられる。遊び時間はむろんだが、体育の時間でも子どもたちはあまり大きな声をあげることなくこやかだが、しかし、静かに動き回っている。

教師と子どもとの関係という意味では、それぞれの社会にその社会なりの感じが認められるが、その中でも強く印象に残ったのはソウルの教室だった。

教室の中はしんとしている。といっても、バンコクと異なり一種の緊張感がただよっていて、子どもたちの姿勢もちゃんとしている。よく見ると、子どもたちの手は椅子のうしろにある横の棒（補強のために入っている）を握っている。そして、「わかった人は手をあげて」と言われると、棒を握っていた手をほどいて5本の指をきちんとつけて、半分の高さまでまっすぐに腕をあげる。もちろん、無言のままだ。

そして誰かが指名されると、手をさっとおろし、うしろの棒をにぎる。かなり異様な光景なので理由をたずねてみた。そうしないと、子どもたちはいたずらをする。だから、いたずら防止に椅子のうしろの棒を握らせているという。

そうした教室風景はひとつの学校だけでなく、他の学校でも程度の差こそあれ、同じように行われていた。さらにいうなら、きびしい規則が作られ、それがきちんと守られている教室の風景は、教室外の体育の時間や朝の会などにも認められた。

動作がきびきびしていて気持ちが良いが、なんとなく不快感もする。考えてみると、筆者が第二次大戦中過ごした国民学校に雰囲気似ている。ひとくちにいって、ミリタントな教室風景である。

文部省の統計 (Primary Education in Thailand 1987) によると、小学校の就学率は97.4%で、不就学児は2.6%だという。また、学年別の就学児数は以下の通りである。

1年	106.2万	4年	98.1万
2年	100.1万	5年	96.5万
3年	100.2万	6年	91.0万

学年が上がるにつれて、就学児の割合がへっている。子どもの数そのものも少なくなるのかもしれないが、それにしても、高学年になるにつれて、学校をやめていく子が少くないことを示す数値である。

文部省を訪ねた折、バンフレットをもらった。「タイの子どもたちのより高い生活の質を求めて」(A Quality of Life for the Thai Children)と題されたもので、寄付金をつのるためのバンフレットだが、その中に、初等教育レベルのタイ教育の課題がのせられていた。

1. 給食を普及させるプロジェクト
2. 井戸を掘り、水をためるタンクを作るプロジェクト
3. 学校図書室を充実させるプロジェクト
4. 救急看護のためのキット（箱）を普及させるプロジェクト
5. 運動場を整備するプロジェクト

6. 僻地につとめる教師を助成するプロジェクト

7. 地方の幼稚園に玩具を送るプロジェクト

1～7のどれでもいいから、どれかへの献金を求めるもので、ここらがタイの教育のかかえている現実の問題なのであろう。とにかく、あるレベルまでの初等教育を津々浦々にまで普及させねばならない。そうだとすれば、

形式を決め、それを地方に守らせる形をとることが大事になる。とりあえず、学校の自主性に目をつぶり、法規通りにまず、学校らしいものを作る。タイの教育の現実、何十年か前の日本に近いのかもしれない。そうだとすれば、タイの教育を見て型にはまっていて個性に乏しい、そして、中央集権的で体質がよくないなどと批判をするのは、時期尚早なのであろう。

[オークランド]

ニュージーランド版の調査票

国際比較調査を行うというのはやさしいが、いざ実施するとすると、さまざまな問題が生ずる。とくに共通の項目を設定して、それをそれぞれの国の言語に直していくのがむずかしい。子どもの遊びひとつを例にしても、この社会の子も「かくれんぼ」をしているとは限らないし、仮にかくれんぼをしても、それを現地で何というのかをたしかめる必要がある。

「7つの都市の子どもたち」(『モノグラフ・小学生ナウ』vol.8-10)でシアトルやソウル、タイペイなどで行った調査結果を発表したが、それもそうした過程を通じて調査を実施したものであった。

今回調査を実施したニュージーランドは英語圏なので、アメリカで実施した調査票を基本的に利用できるはずだが、ボストンやシアトルでプリテストを行って作成した調査票をニュージーランドのオークランドやウェリントンでそのまま使えるとは思えない。とくに、米語と英語との微妙な違いが気になりになるし、それとニュージーランドの子には、アメリカの子と異なる生活があろう。そう考えて、ニュージーランド版の調査票を作るためのプリテストを行うことにした。

まずニュージーランドの教育関係者にアメ

リカ版を送り、手直しをしてもらった後、現地入りをして小学校で子どもたちに調査を協力してもらおう。そのとき、わかりにくいところや書きにくいところを言ってもらい、そこをチェックする。最後に学校の先生方に集ってもらい、子どもの声を参考にして、先生方からアドバイスしてもらおうという段取りである。

正直に言って、われわれの語学力では、英語のある単語がおとなっぽいか、それとも幼稚なのか見当がつかない。あるいは、堅苦しい文か、それともくだけすぎかというような感じもわかりにくい。先生方にはそういう観点からのアドバイスを求めたのである。教室で子どもたちの声を聞くと、いかにもその社会らしい問いが多い。そこで以下、ニュージーランドで子どもたちから出された質問のいくつかを紹介することにしたい。

「一緒に住む」(live with)

この設問に質問が出るとは思わなかった。どうしたことなのかたずねてみると、彼の両親が離婚したらしい。そして、その子は妹と共に母親のもとで暮らしているのだが、母親は2人の子を持つ男性と再婚し、父親も1人の子持ちの女性と新しい家庭を築いている。彼としては自分と妹と母、そして別居している父の4人を家族(family)と考えたい。し

かし「一緒に住む」(live with) となると、父がはずれてしまうし、そうした言い方をすれば新しい父とその子との計5人が家族になるが、それでは彼の気持ちになじまないらしい。

実をいうと、地元の人が熱心に準備してくれたので、プリテストはオークランドで2校、さらにウェリントンへ移って2校、計4校8クラスで実施することになった。そして、8クラスのうち、6クラスで同じような質問を受けた。

もちろんケースはさまざまで、母と同居しながら父のほうにも週2日行く子。あるいは自分(女の子)は母と共に住み、兄が父のほうで暮らすタイプなどがあつた。

しかし、いずれの場合も、親の離婚を体験している子どもだった。もちろんアメリカでも離婚の話聞く機会が多かつた。シアトルやニューヨークでは、小学生の3~4割が親の離婚を体験していた。そして、家庭が崩壊し、朝食をとれずに登校する子が多いので、学校で朝食を用意するようになった。

アメリカと比べ、ニュージーランドは自然環境に恵まれた人間的な土地柄なので、離婚などは少ないのかと思つてゐた。しかしプリテスト段階で、こういう質問が出るくらいに離婚が多いらしい。

書店でニュージーランド年鑑を求め、離婚についての資料を探すと、表44のような数値

が掲載されてゐた。

結婚と結婚外とに分けて統計をとつてゐるのが興味深いが、それにしてもニュージーランドでも4分の3の子が母親に引き取られてゐるらしい。

この調査の中で、両親のイメージを国際比較したかつたので、「あなたはお母さんが好きですか」を質問するつもりだつた。しかしオークランドの教師たちの意見では、この設問はやめたほうがよいという。

「お母さん」という言葉で、母親のいない子も少なくないし、生みの母以外の人と同居している場合も予想される。したがつて質問するとなると、母親についてくわしい条件をつけなければならないが、このアンケートではそこまでしなくてもよいのではという判断である。

こうした話を聞けば聞くほど、離婚が子どもの心に影を投げかけていると思わざるを得ない。離婚するには親たちの間でそれなりの理由があるのはたしかであろう。しかし子どもにとって、それは親の事情であつて、子どもと関係はない。

いわば親の事情からこの世に生を受け、そして親に依存して暮らしているのに、親の勝手に親が別居してしまう。そうなると、子どもは家族を失うことになる。離婚するなどはいえないが、離婚にあつて子どものしあわ

表44 離婚した家庭の子ども

(%)

	結婚の形	結婚外の形	計
母のもとに	73.2	77.9	75.1
父のもとに	13.5	8.4	11.5
その他	13.3	13.7	13.4

せを考えてほしいと思った。子どもたちは小学生のうちから、人間不信におちいってしまうからである。

学年 (grade)

子どもたちが「学年」(grade)を指して、「どう書いたらよいか」という。あたり前すぎる項目だと思うが、オークランドでは日本の山本学級のように、学級に担任の名をつけている場合が多いという。

それだけならそれほど問題はないはずだが、よく聞くと、状況はもう少し複雑らしい。ニュージーランドでは、大半の学校で複式学級制がとられている。1～2年、3～4年、5～6年をひとつのクラスとする。

そう書くと、ニュージーランドは人口が少なく小規模校が多いから、複式学級制をとっているのではと思う。しかし、オークランドで訪問した学校は、いずれも400～500人の子どもが在籍していて、決して小規模校ではない。ということは、何か教育的な考えがあって複式制をとっている感じになる。

実際に統計年鑑を調べてみると、ニュージーランドの学級サイズは図13の通り、25～34人がかなりの割合を占め、決して小規模ではない。

2つのクラスを一緒に教えると、上の学年の子は下の学年の子の世話をし、下の学年の子も、次の年に上の学年になる。したがって、学級の中で世話をしてもらい、そして世話をするの2つの役割をとれる。それに2つの学年の子がいると、子どもたちの個性の幅が広がるので、さまざまな子がいるのがわ

かる。

異質の子の存在を知ることが、互いを尊重する態度に通ずることを考えると、この制度はよい方法だと思うと、先生方は話していた。

アメリカのオープンコンセプトのようにはっきりとネーミングしているわけではないが、授業は個別指導の形をとっている場合が多い。したがって、複式の形でも授業にさほど抵抗がないのであろうか。

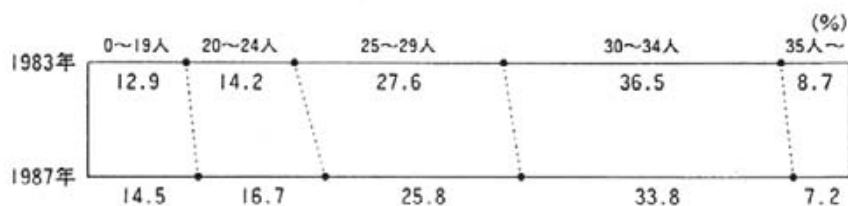
この方式がベターなものかどうか、今でもわからない。わざわざ複式の形をとるまでもあるまいとも思う。しかし発想を変えて、学級の目的が多様な子どもの存在を認めながら集団を作るのだとしたら、この方式を否定しにくい。というより、ひとつの意欲的な試みかもしれないと思うようになった。

pocket money (こづかい)

国際調査のむずかしさは、こづかいなどにもあらわれる。というのは、アメリカの子はこづかいをもらう習慣がないので、ニュアンスが多少異なるが、「allowance」の形で調査票を作り、それとは別に「働いて収入を得る」(日本流ではアルバイトだが、「仕事につく」「get a job」の単語を使った)の項目を設けた。そして調査結果でも、芝刈りやペイント塗り、スタンドの売り子などの形で働く子どもは少なくなかった。

しかし、ニュージーランドでは子どもが働く習慣はなく、子どもにこづかいを与えているという。しかし日本と異なり、父親がこづかいを与える場合が多く、そこからポケットマネー (pocket money) の言い方になるらし

図13 学級の規模



い。

始めのうち、アメリカ版の「allowance」を使ったので、「この言葉がわからない」という子が多かった。そこで、次の学級からポケットマネーの言葉を使ったところ、誰も質問をしなくなった。

もっとも、オークランドではスナックを買う子は少ないが、日本と同じようにコミック雑誌を買う。あるいは、音楽を聴くためのカセットを求める。そして、ラグビーなどのスポーツ用品を買うなどが、主な使い道であった。

この他、子どもたちからさまざまな質問が出された。そして、そうした質問を手がかりとして、すでにふれた通り、小学校の先生や教育委員会の方々にアドバイスを求め、本調査用のアンケート用紙を確定した。

評議会が校長を任命

本調査を実施するために、1989年6月、ニュージーランドへでかけたとき、オークランドの書店に入った。アメリカや韓国などと違って、日本でニュージーランドについて書かれている本は旅行案内書くらいで、政治や文化などはほとんどわからない。そこで、現地についてから資料を入手しようとした。

そうして入った書店で、小さなパンフレットが目にとまった。「明日の学校」(Tomorrow's Schools)がメインタイトルで、副題は「ニュージーランドの教育改革」とある。しかも、文部省の発行なので、教育関係のガイドブックのような感じがする。さっそく求め、ページを開いてみた。

読み始めて驚いた。この本が教育改革について書いているのはたしかだが、問題はアプローチの仕方で、各学校に評議会 (board of trustee) を設け、その評議会に全権をゆだね、教育改革を進めたいという。つまり、かなりラジカルな地方分権化の試みである。しかも、そうした試みを現実化するためのこまかな規定がなされている。

「○評議会は教職員の法的な雇主であり、

教職員の雇用問題に責任を持つ (1・1・14)

○評議会は校長を任命する。そして、校長の推せんする教職員の採用を認める (中略)

(1・1・15)

○評議会は教職員のサラリーなどの条件を決めることとする (1・1・18)」

こうした法規を手がかりとすると、どうやら学校ごとに評議会を作り、その評議会が校長を任命し、校長の推せんする教職員を採用するらしい。そうしてみると、「明日の学校」(Tomorrow's Schools)と題されたこの学校改革法——というより、イギリス流のガイドラインの感じに近いが——の1条に、以下のような規定がみられる。

「教育行政の基本的な単位は個々の学校である。そして、個々の学校では評議会が全体的な方針を決定することとする。ただし、日々のできごとに対する責任は校長が負うこととする。校長は学校内で、専門職的なリーダー (professional leader) として、評議会に責任を負う (1・0・1)」

日本流に解釈しなすと、学校のPTAが学校の教育方針を決めると同時に校長を任命する。そして、校長が専門家として教職員を統率して、学校を運営していくというスタイルらしい。なんともラジカルなプランで、研究者のデスクプランではないかと表紙を見直してみた。しかし、文部大臣デビッド・ランジ (David Lange) が発行人なので、公式の文書と思わざるをえない。

評議会の構成

評議会が学校の意志を決定するのであるから、評議会の構成が問題となる。

「小中学校レベルの評議会の構成は以下の通りとする。

- ① 生徒の親たちから選出された5人の委員
- ② 校長
- ③ 教員間から選出された1人
- ④ 中学校以上での生徒の間で選出された1人



⑤ 学校により2名の専門委員を任命できる

⑥ 評議会が必要と認めた最大4人までの臨時委員を任命できる(1・1・33)

したがって、通常の小学校の場合、7人の委員構成で、このうち、校長と教員代表を除く5人が父母から選出された委員となる。

なお、評議会構成の項には、その他に以下のような規定が認められる。

「○親 (parents) という言葉には生徒を直接保護している人 (immediate caregiver) を意味する(1・1・34)

○校長や教員代表、そして、生徒の代表が議長になることはできない(1・1・36)

○評議会の構成メンバーは選挙などにあたり、同じレベルの力と責任を持つこととする(1・1・39)

○校長は国のガイドラインにしたがって投票することとする(1・1・40)

○評議会は地域から公平な代表を選出することが望ましい。とくに、女性、マオリ族、太平洋の島々の出身者、労働者階層などからの代表を選ぶように心がけてほしい(1・1・41)

○評議会委員の選出は2年ごととし、再任される者は構成員の半数以下とする(1・1・42~43)」

その他のくわしい手続きは省略したいが、委員の構成についてこまかな配慮がなされているのがわかる。そしていずれにせよ、親たちの代表が学校運営の主体となって、学校を

動かしていくらしい。それだけに、校長や教員の立場が微妙になるが、その点について、以下のような規定がみられる。

「こうした制度の許で、教師の役割が大きく変わることはない。そして、教師たちは評議会と密接な関係を結び、予算その他のことについての決定により積極的に関与できるようにしよう(1・2・17)」

教員の間にも不満

ホテルの中で、40ページ強のパンフレットに一気に目を通した。親たちから代表を選出し、その人たちが評議会を作り、校長や教員のアドバイスを耳にしながら、しかし、親たちがリーダーシップを握って、学校を運営していく。しかも、そうした評議会をニュージーランドのすべての学校に設けるという。

夢物語のようで、なんとも信じにくい。いわば素人の集団に校長の任命権を与え、学校の方針を決めるという。そんなことをしたら、学校がめっちゃくちゃになり、教育の荒廃が進むのと思う。しかも、そうしたナンセンスと感じられるような改革を、国をあげて学校ごとに実施していくつもりらしい。

実をいうとニュージーランドは、子どもを対象とした国際調査の打ち合わせを行うために訪れた。同じ英語圏でもアメリカとニュージーランドでは、米語と英語の違いに加え社会状況も異なるので、同じ設問でも聞き方が違う可能性が考えられるし、それにニュージーランド独特の問題もありうる。

そう考えて、プリテストを兼ねて、ニュージーランド行きとなったわけだが、具体的には、学校で子どもたちにアンケート用紙に記入を求めることとした。

学校へ行くから、当然、校長や先生方にも会う。そこで、校長に評議会についての感想を聞くことにした。

「『明日の学校』(Tomorrow's Schools)を読んだ」といったとたん、校長の「どう思いますか」という問いが戻ってきた。聞けば、つい2~3日前にも何人かの校長が集まって、

評議会対策のための会合を持ったという。そして、翌日、校長の努力で何人かの先生が評議会についての説明に集まってくれた。

この評議会とよく似た制度は、すでにオーストラリアで実施されているほか、イギリスやアメリカでもほとんど同じ試みが行われているという。残念ながら何度もアメリカを訪れているが、評議会制を見たことはない。しかし、アメリカの教育風土を考えると意味的にニュージーランドと同じような試みが行われていても不思議ではない。

それはともかく、ニュージーランドではあまり十分に話し合うことなく、この試みが実施される運びになったらしい。とくに、教員間では不満の声が高く、これでは、学校の運営がうまくいかなくと危機感がついていた。しかし、議会をはじめ、人々がそのほうがよいというのだから仕方がない。この方式で様子を見ざるを得ないだろうという。

オークランド市内のいくつかの学校では、児童1人について、2人の親権保有者——通常は父母だが、いずれかが不在の場合、祖父母やおじ、あるいは、子どもの世話をしている人でもよい——を認め、その人たちの投票で委員を決めたとのことであった。

学校の姿はさまざま

この制度は1989年6月に委員を選ぶための投票が行われ、9月の新学期から評議会が発足する運びになっていた。したがって筆者が訪れた6月末は、制度発足直前の混乱のまっただ中にあった。

もちろん、評議会は国の教育基準に準拠するという範囲内で自主権を行使すると定めてあるから、まったくのフリーではない。しか

し何百の学校にそれぞれの評議会ができるのであるから、そのひとつひとつに気をくばることは不可能であろう。したがって、この制度は学校の運営を親にゆだねるのを基本としている。

パンフレットの序文で、この制度は「地域社会と専門職としての教師集団とのパートナーシップ」により成り立つと指摘しているが、パートナーシップは言うは易く行い難い。

「よい親のいる地域ではよい評議会ができるが、なにかと問題の多い親の地域では評議会のレベルも下がる。そうした形で、地域の持つレベルの差が学校のなかに持ちこまれ、教育の機会均等が失われるのでは」と筆者が質問したのに対し、ニュージーランドの文部省関係者も、「その通りだと思う。しかし、そういうことも含めて、学校の自主性を尊重したい」と答えていた。

諸外国へ出かけると、その国らしい変わった教育実践に接することが多い。そしてはじめのうち、ショックを受ける。しかしよく考えてみると、そうした改革や実践から得るものが多いのに気づく。

このニュージーランドの改革も、一見したところ急進的で、失敗が確実な試みのように思う。しかし、アメリカの教育委員会制は、ニュージーランドの学校を単位とした改革を市町村レベルに置きかえたものにすぎない。そして、アメリカへ訪れると、教育委員会にさまざまなレベルがあり、そしてカラーがあるが、そうした開きがアメリカ教育の個性を作り、活性化を図る源泉のように思う。そうだとしたら、学校単位の改革も、さほどラジカルでないのかもしれない。

🗺️ [ロサンゼルス] 🗺️

地域の住み分け

ロサンゼルス版の調査票を作成するためにロサンゼルスを訪ねた。アメリカは何度となく滞在しているので新鮮な感じは味わいにくいですが、それでも少しずつ変化が生じてきているのがわかる。

ロサンゼルスも、訪れるたびに荒れはてている感じが強くなってきた感じがする。

ロサンゼルスといえば、リトル・トウキョウを連想する人が多だろう。ヒルトンホテルやミヤコホテルがある上に、日本食の店なども並んでいるので、夜遅くまで日本人の観光客でにぎわっている地域である。

そのリトル・トウキョウのすぐ隣に、ホームレスのエリアが広がっている。ホームレスと呼ばれる人たちが多くので、住人たちはすべて逃げだしてしまい、町はなかばゴーストタウン化している。そして、キリスト教会の運営しているミッションが何か所かあり、そこへ行くと、食事を支給してくれる。

そのため夕方になると、ミッションのまわりに夕食を求めるホームレスの列ができる。「ミッションがあるから、ホームレスが頼って働こうとしない。だからミッションは手を引いたほうがよい」。「いや、ミッションがあるから、ホームレスがなんとか生活できる。これ以上、治安を悪くしないという意味で、ミッションの働きを高く評価したい」。

案内役をしてくれたアメリカ人の間で、ミッションの役割をめぐる議論が始まった。話を聞いていても、どちらにも一理があり、それだけにむずかしい問題なのであろう。

ホームレスといっても、全体としては心のやさしい、あるいは無気力な人が多く、それほど危険ではないというので、町中を歩いてみた。おとなにまじって、子どもたちの姿が見られる。麻薬の売人の下請けをしたりして

いることが多く、ときにはこうした子どもたちが殺人事件などに巻きこまれる場合が少なくないと聞く。

ホームレスの地域から数ブロック行くと、急に雰囲気が変わり、メキシコ系の人たちの姿がふえる。町中が活気にあふれ、路上にたくさんの人たちが集まり、中南米の雰囲気が強い。

そうしたメキシコ系の人たちの多い地域の外側には、黒人の住む地域が広がっている。さらに車で15分くらい郊外へ向かうと、自然の雰囲気がやや残った地域があらわれてくるが、ここには韓国や中国などのアジア系の住人が多いという。

自然界に「住み分け」と呼ばれる現象がある。動物がそれぞれ住む地域を分けて、いわばバランスをとって共存している関係を指す言葉だが、ロサンゼルスの旅していて、そうした「住み分け」という言葉が浮かんできた。

ちなみに、いわゆる白人たちはアジア系の外縁に住んでいるので、ロサンゼルスの中心部はカラード、郊外に白人という住み分けのスタイルとなる。そして、サンタモニカやビバリーヒルズといった有名な場所は別としてトーランスなど、かなりの郊外に静かな住宅地がみられる。

ワシントンDCを訪ねたとき、昼間の人口はともかく、夜になると、市内は黒人を中心としたカラードの人たちが大半を占め、治安がきわめて悪い。そして、白人は郊外の住宅地に住み、朝になると郊外から通勤してくるのを見聞した。

実際に、市内のホテルに滞在したが、昼の静かなワシントンの雰囲気と異なり、夜になるとホームレスの人たちがいはいして、なんとも不気味な町になる。正直に言って、とても外出できる雰囲気ではなかった。

第一言語はメキシコ語

それぞれの文化を持ったそうした人たちが地域を作り、そして地域性をふまえて、学校が成立する。そうになると、学校もそれぞれのカラーを持たざるをえない。少なくとも日本のように、規格の確保された同質の学校がどこにでも存在する形は考えられない。

今回の調査旅行の中で、たまたま訪ねたロサンゼルス郊外の学校では、520名の児童のうち、メキシコ系の114名をはじめ、韓国、中国、プエルトリコなど、28か国の子どもたちが通学していた。中には、エジプトやスーダンなど、どうしてその国の子どもがアメリカに來られたのかを疑問に思う子どももいた。

そうになると、アメリカだから英語で教えるというわけにもいかず、実際にこの学校では、メキシコ語を第一言語とし、英語を第二言語、つまり、English as Second Language. E. S. L.の授業を行っていた。

アメリカにいるはずなのに、教室の中ではラテンアメリカの雰囲気だけだっている。そして、校長先生の話では、2～3年のうちに韓国語を第一言語にする教室を開く予定で、

そのための準備に入っているという。

こう書いてくると、かなり異質の学校という感じがするが、実をいうと、こうした学校をこれまでに何回も見学してきた。しかも、アメリカだけでなく、ヨーロッパでも人種がまざり合い、そして、ひとつの言語——それがその国の言葉であっても——だけでは、教育をできない状況を視察してきた。

ロサンゼルスの前に滞在していたニュージーランドのオークランドでは英語に加え必須の外国語として、マオリ語が課せられていたし、ポリネシアン言語の導入も検討中とのことであった。タイペイでも、北京語だけでなく、台湾語の教育を求める気運が強まっている。さらに、マレーシアではマレー語の授業を行っているが、中国系、インド系、英国系のそれぞれの人から、それぞれの言語を教室で教えてほしいという要望が寄せられている。そして、マニラでは、民族的なタガログ語の授業に対し、英語の授業を望む人たちの要望が強まっているとのことであった。

教室の中に、人種的にさまざまな人たちがいる。そして、人種が異なるということは、言葉だけでなく食事や衣服など、生活そのも



のが異なるのを意味する。いわば、自分とは異質の存在として、友だちがいることになる。

こうした感覚の違いが積み重なると、学力をつけるのはうまいが、個性を育てるのは下手という日本の学校批判に連なってくる。逆の見方をすると、アメリカでは人種のまざり合いからいっても、個性に対応せざるをえないが、それだけに平均的な学力の伝達がむずかしくなる。

話をもとに戻すと、見学したバイリンガル・スクールでは、教師たちはメキシコ語をその人なりの仕方であらわして話していた。話せないと子どもとコミュニケーションができないからである。そして、メキシコ語の他、韓国語や中国語、さらに日本語も話せる教師が2～3人ずついるのが印象的だった。まさに、国際化された学校という感じがする。

その翌日、トーランスの近くの白人の多い学校を訪ねた。こじんまりとした静かな学校で、ここでは当然のことながら英語だけの授業が行われ、美術や体育などを重視したオープン・コンセプトの教育が展開されていた。

われわれがイメージに抱くアメリカらしい学校だが、先に紹介したバイリンガル・スクールとは車で30分もかからない距離に2校がある。アメリカには学校の数だけのタイプの学校があり、したがって、一口にアメリカの学校といえないのが、アメリカの教育だといわれる。その後、ロサンゼルス郊外で、何校かの学校を見学したが、それぞれにユニークな実践を展開していた。そして、あらためて一口にいいあらせないのがアメリカの教育らしさなのだと感じた。

揺れ動くアメリカの女性運動

そして、調査結果の中でも性差についてのデータが日本の想像をはるかに上回るものがあったのはすでにふれた通りだが、ロサンゼルスでもやはり、離婚の問題が子どもたちの生活に悪い影響を与えているのが問題になった。

こうした事例にふれているうちに、離婚の

増加に象徴されるように70年代後半から80年代にかけて、アメリカが人種問題と同時に、性をめぐる論議に大揺れだったのを思いおこした。

1978(昭和53)年に、アメリカを訪ねたとき、ちょっと時間がとれて、サンフランシスコの書店へ入っておどろいた。ドアを開けた正面、日本でいうなら、ベストセラー・コーナーとでもいう場所に、女性問題の本が山積みされていた。しかも、学生運動で知られたパークレーなどとはほど遠い、ダウンタウンの書店である。

その後、ロサンゼルスやシアトルなど、目ぼしい町についたとき、書店をひやかしてみたが、女性問題のコーナーに大きなスペースがさかれている事情は変わりなかった。そういえば、何回か出席した会議の議長は、チェア・マン(chairman)ならぬ、チェア・パーソン(chairperson)とよばれていたし、ミシィズ(Mrs)でなく、ミズ(Ms)を耳にする機会が少なくなかった。

筆者が、アメリカの女性問題を身近なものに感じたのはその頃だったが、実をいうと筆者がアメリカを訪れた昭和53年は、その2～3年前からたかまっていた「男女同権憲法修正案」(通称ERA Equal Rights Amendment)運動の余波が残っていた時期で、54年秋に、アメリカを訪れたときには、そうした動きがやや下火になったせいも、書店の中で女性問題のコーナーの占める比重が、前年より後退していた。

ERAとは、1972年に連邦議会を通過した「法の前の権利の平等は、性別を理由として、合衆国または各州によって、否定または制限されてはならない」の州議会批准を求める動きである。アメリカの憲法改正には、連邦議会上下院が3分の2以上で議決すると同時に、4分の3の州(51州中の38州)の批准が必要である。そして、法案が連邦議会通過後は、38州の批准獲得が運動の焦点となっていた。

もちろん、こうした動きの口火を切るきっかけになったのはベティ・フリーダンの「新



しい女性の創造』(The Feminine Mystique)で、この本がアメリカで出版され、ベストセラーとなったのは、1963年であった。

現在では、ウーマンズ・リップの古典ともよばれるこの著作の中で、フリーダンは、「豊かな社会アメリカの中流階層の主婦たちが、女性らしさを礼讃するアメリカ文化の中で、人間らしさを喪失している。冷静な目でみつめれば、専業主婦にとっての家庭とは、人間らしさを奪う収容所にすぎない。女性らしさを讃美するわなにかかって、家事を職業と考えたなら、空虚さしか残されていない。家事を合理化し、人間的に成長するために、多くの努力を払ってほしい」と主張している。

ちなみに、訳書の「創造」は将来を見つめでの訳語で、正式には「女性らしさの神話」とするのが、原書の内容に則している。それはともかく、フリーダンの書いた内容は、かならずしも新鮮なものでなく、家庭だけを生きがいとする主婦の生き方に疑問を投げかけたただけのものであった。しかし、彼女自身が郊外に家を持ち、2人の子を育てる典型的なアメリカの主婦であり、しかも、そうしたキャリアの女性らしく、こまやかな現象をつ

み重ねながら、やわらかいトーンで問題提起を行ったので、主婦層に与えた衝撃はきわめて大きかったといわれる。

その後、彼女は、1975年、全米女性組織(NOW National Organization for Women)を組織し、職場での機会均等、中絶の権利、託児所の設置などの広範なセクシズム(男性優位の見方)打破の運動を展開することになった。そして、主として中流の主婦が運動母体となって、NOWの組織化が進み、この間、1972年、200部から出発したウーマンズ・リップの代表的な雑誌“Ms”が、45万部の発行部数を示すにいたった。

人間の絆を求めて

しかし周知の通り、そうした運動の推進役であったフリーダンは、1981年、『セカンド・ステージ』(THE SECOND STAGE、下村満子訳集英社)を発表した。その中で第一段階としての女性の解放は間違っていなかった。しかし、家を離れ社会へ進出したことが、女性にかならずしもしあわせをもたらさなかった。

古い家庭のあり方へ戻ることはないにして



も、男性と対立するのではなく、男性とともに家庭、あるいは人間の住む環境を作っていくと、戦略の転換を訴えている。

『セカンド・ステージ』については、急進派から「フリーダンは老いた」という批判が投げかけられる反面、保守派は自分たちの正統性が裏づけられたとして、本書を利用するなど、多くの波紋が広がったといわれる。

しかし、あらためて『セカンド・ステージ』を手にしてみると、フリーダンの悩みがわかるような気がする。女性らしさの神話に気づいて家を出ても、しあわせは見いだしにくく、かといって、戻るには神話に気づきすぎている。

現在のアメリカの多くの女性たちは、そうしたジレンマにおちいっているのであろう。そうはいっても、アメリカの離婚が子どもたちから安住できる場を奪っているのはすでにふれた通りだが、この数年来、アメリカでも離婚を見直そうとする動きが強まっている。

そういえば、このところ上映されるアメリカ映画で、家族愛をテーマにしたものが多い。ショーン・コネリーが祖父役をした「ファミリー・ビジネス」、そして、未婚の母となったキャリア女性が父親を探そうとする「ベビー・トーク」（日本のCMでは赤ちゃんが口をきく部分にセールスのポイントが置かれすぎていた）。また、ジャック・レモンがふけ役をして注目をあびた「晩秋」（なお、原題は「DAD」親父）は、父と息子との人間的な絆を問題にしている。

さらに兄弟についてだが、自閉症をテーマにした「レインマン」も、ダスティン・ホフマンの演技が印象に残る。さらに、「ドライビング・ミス・デイジイ」は、ユダヤ人の老婦人と黒人の運転手という関係を通して、家族を越えた人間愛に、人間としての絆を求めようとしている。

離婚はやむをえないとしても、それならば人間が生きていくのに必要な人間的な絆をどこに求めたらよいかを模索しているのが、現代のアメリカなのであろう。桐島洋子さんの『淋しいアメリカ人』という指摘や下村満子さんの『アメリカの男たちは、いま』、そして、多賀幹子さんの『シングル・マインド』など、アメリカ人の絆を求める動きを紹介する本に優れたものが多いが、子どものサイドに立つと、今すぐにでもそうした絆が作れないと、子どもたちの心が空白になり、絆を見失い漂流してしまう。そうしたこわさを調査を実施しながら、痛感するようになった。